

西周時代寶貝の研究

近藤 喬 一

I

商の首都に集中された南海産の寶貝は、商後期には王朝の独占的な専有物となる。商王朝と祖先神を共通にもつと觀念された貴族階層・戦士集団を構成する各氏族は、共通の祖先神を祀ることを許された証に、青銅彝器を製作した。製作は王朝直属の工房において行われたものと思える。有力貴族層や戦士階層は、王や自身の所属する階層のより上位者から、重要な祭祀や軍事の折の功績を賞賜され、そのシンボリックな意味としての寶貝を賜与された¹。そのことが誉れあることとして、祖先神を祀る青銅彝器に鑄込まれるようになるのは、安陽後崗圓祭坑から出土した戊嗣子鼎²（林巳奈夫編年³の殷後期ⅢB期）やアーサー・サックラーコレクションの罍⁴（林・殷後期ⅢB期）に始まる。

墓の副葬状況を見ると、王や有力貴族層は寶貝を身体装飾や衣服にとじついたり、馬の顔面・狗の頸・ナイフを入れる袋の飾り・皮の太鼓の縁取りなどにも利用している。寶貝は単なる装飾ではなく、護符とか辟邪の意味が強かったと思える。戦士たちは寶貝を綴じつけた衣服あるいは身の下半を覆う布を纏って葬られている場合がある。戦士やさらに下位者は寶貝を口中に含むか手中にもたせることが多く、G.Elliot Smith⁵が想定した「寶貝が女性生殖器を連想させることから来る再生の思想」に最も重点があったことを端的に示している。

商と王朝を交代した周にあってはどうであろうか。安陽後崗圓祭坑の被葬者は、殷の紂王に羹にされた文王の長子伯邑考ではないかという見解⁶もある。これが事実なら周族は商末期に当然のことながら寶貝の賜与とそのもつ意味を熟知していたと思える。

中国内陸で早くに寶貝を愛好する風習をもっていたのは、甘肅・青海にひろがる馬廠期中期の新石器時代文化である。その風習は齐家文化・卡約文化とうけつがれた。先周文化とこれら甘肅の新石器時代終わり頃から初期金属器文化にかけての関係は十分明らかではないが、商族とは別に周族も早くから寶貝を愛好する風習をもっていた可能性はあろう。これは今後の検討課題としておきたい。

II

今回は西周時代の寶貝の問題を取り扱う。寶貝を愛好する風習は、西周時代、周王室と関係を持った国々に広く行き渡っていた。しかし国と時期により、その扱い方に差があった。殷人と周人で寶貝の扱いが異なるのか。国によって異なるのか。時期によって異なるのか。身分によって異なるのか、性別によって異なるのかなどといった観点から検討したい。

西周時代には『春秋左氏伝』定公四年(506B.C.)の衛の子魚(祝佗)の言葉によれば、周王から諸侯が各地に分封されたという。その時、殷の遺民達も宗族の形を留めたまま、支配者となった各地の諸侯に与えられたとされている。あるいは強制的に移住させられたこともあったらしい。西周時代の墓葬がまとまって発見されているのは、燕国、強国、晋国、衛国、魯国などがある。虢国について、中国の研究者は西周時代に含めて考えている場合もあるが、青銅器は春秋早期のものが中心と判断するのでここでは取り上げない。応国、邾国、長氏等の墓の資料についてはまだ十分なものがない。なお古公亶父の都した周原の西周墓はまとまって報告されたものがない。

文王、武王の都した豊京、鎬京のいわゆる宗周では、はやく1955-57年の間の長安県灃西発掘報告⁷が、張家坡と客省荘の182基の墓葬のデータを提供している。さらに1967年、張家坡で124基の西周墓葬が調査され報告⁸されている。また西周時代の畿内の有力貴族であった井叔の家族墓地も調査されている。武王が計画し成王の時期に都が造営された成周については、西周時代のまとまった墓葬の報告は実態が明らかでないものが多い。成周の地にあたる洛陽北窯の墓葬⁹は蔡運章によれば、370余基発掘されていて、西周王室の高級貴族の墓地ということであるが、残念ながらデータは断片的なものしか報告されておらず、検討のしようがない。封建された各国での寶貝の取り扱い方はどのようなものであったろうか。燕国、強国、晋国を中心に検討する。また畿内の代表として張家坡の西周墓群を中心に検討する。

なお西周時代、周王によって諸侯が封建されるなどということはなかったという宮崎市定説¹⁰がある。ほんとうだろうか。近年、北京市西南の琉璃河地区の匭(燕)国墓地では西周時代の墓としては初めての4条の墓道をもったX字形の墓ⅡM1193〔図版12〕が発見された¹¹。残念なことに盗掘されていたが、一部遺物が残っていた。銅罍と銅盃と銅觶があるが、罍と盃には同じ銘がある。その銘には「王曰く太保よ、佳かな乃の明、乃の鬯を乃の辟に享(饗)せり。余おおいに乃の饗にこたえて、克に令(命)じて匭に侯たらしめん。羌・馬・獻・雩・馭・微を事せよ。克、匭に入りて土とその嗣を□れ。用って寶罍彝を作る。」とあり、周王が諸侯を分封したことのあったことを立証した。銘によると明らかに、周王が太保に対してその功労を褒め称えて太保(または克)を匭侯に任命し、支配する民と領土を与えたことを記している。

この銘文の読みは2通りあり、北燕に分封されたのは太保召公奭か、燕地に赴任した初代の匭

侯（克）かに見解が分かれており、ⅡM1193の墓の被葬者は召公奭か匭侯克のいずれか¹²と考えられている。器形と紋様から見て林巳奈夫の青銅器編年を参考にすれば、罍は西周ⅠB期が妥当と思われる。盃はⅠA期かⅠB期に似ている。西周Ⅱ期にも似た器形はあるが、そこまで時期を下げる必要はあるまい。銘が同じであることから罍と盃は同じ時期とし得よう。罍は西周Ⅱ期の段階のものに紋様構成が類似している。

共伴した銅戈には内に「成周」の銘がある。河南省濬県辛村¹³M42（林巳奈夫編年では西周前期—中期）からも類似の戈が出土している。銅戟には「匭侯舞戟」とあり、楯飾り金具には「匭侯舞易」とある。舞を匭侯の名だという意見¹⁴もあるが、そうではなくて儀礼の「舞」の際に使用した戟や楯の飾りと考える。なお先に触れた河南省濬県辛村の衛国墓地M42からは、銘はないが同じタイプの戟が出土しており、M68からは「衛師易」銘の楯飾り金具が出土している。これら匭（燕）国や衛国に共通する武器・武具は「成周」の銘が示すように洛陽の成周で、王室により製作され、諸侯に下賜されたものと思える。先に触れた『春秋左氏伝』定公四年の祝佗の言葉には諸侯を封ずる時、王権のシンボルを含め種々のものを殷の遺民とともに下賜したことを記しているが、これらの武器や武具も同じ性格をもつものかも知れない。

寶貝は盗掘されていたために出土状況は明らかではないが、かなりの数量が出土しているようである。寶貝の背は全て磨いて一孔をあけてある。二層台上から出土した寶貝は馬具と伴っており、馬頭の装飾の可能性が高い。ⅡM1193は出土遺物から見て、西周前期後半の可能性が高い。

燕国¹⁵ではほかに大型墓として中字形墓のⅡM202〔図版1〕と甲字形墓ⅡM1046〔図版12〕が知られているが、いずれも盗掘されており、寶貝の出土は報告されているが、出土状況は不明である。

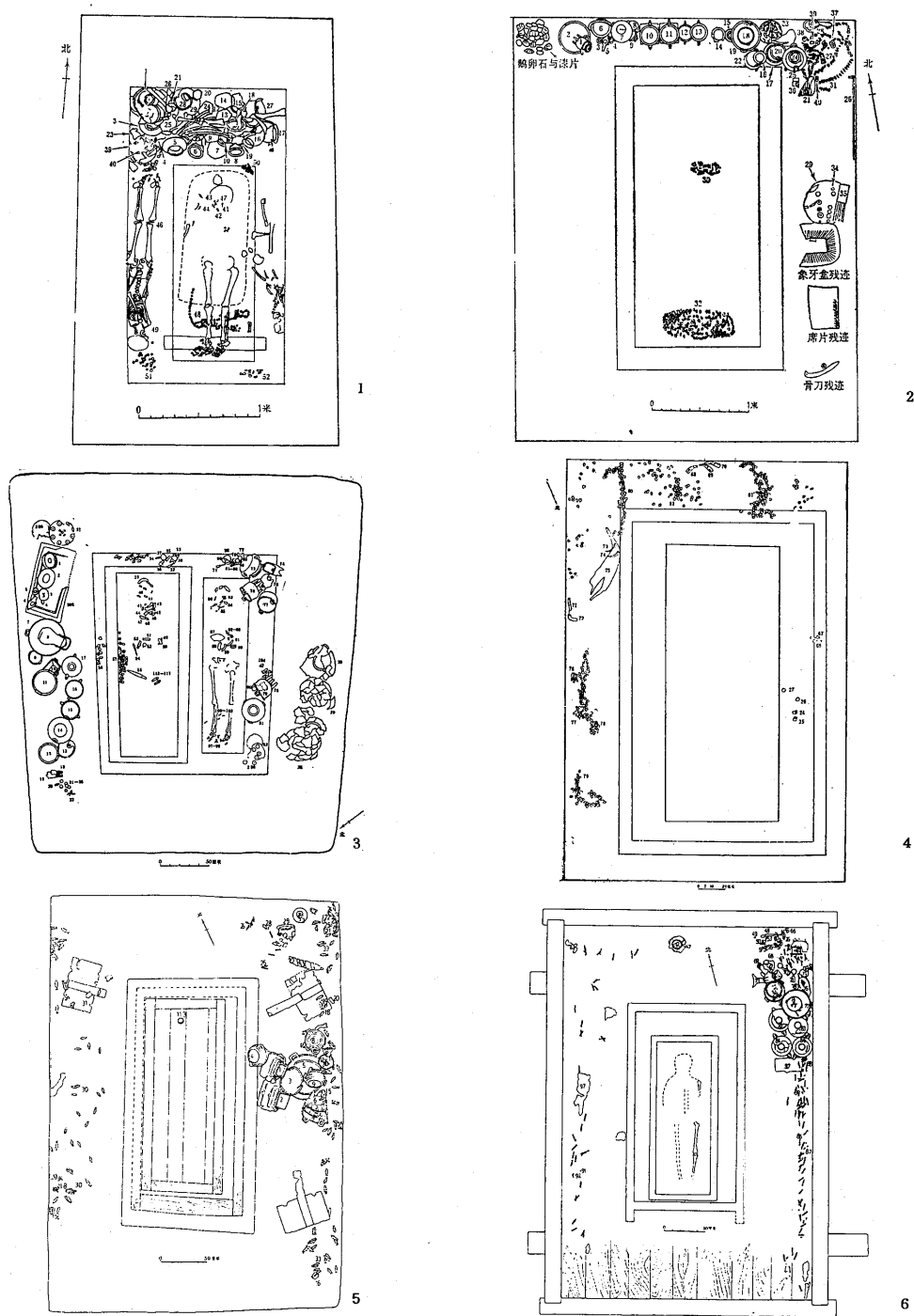
琉璃河燕国墓地の中型墓や小型墓での寶貝の出土はどうであろうか。青銅器の銘から見ると、Ⅰ区、Ⅱ区とも西周早期の墓出土の物しか銘をもたない。中型墓とされているIM52〔図版1〕は復鼎〈「侯賞復貝三朋。復用乍父乙寶罍彝」〉・復尊〈「匭侯賞復綱衣臣妾貝。用乍父乙寶罍彝」〉・爵〈「父乙」〉の銘からみて復の墓、同じく中型墓のIM53〔図版2〕は攸簋〈「侯賞攸貝三朋。攸用乍父戊寶罍彝。啓祺」〉の銘から攸の墓と思えるが、棺内人骨は口中に寶貝数枚を含む。人骨の骨盆のところと脚部にも寶貝数十枚がある。いずれも侯（匭侯）から貝三朋を賞されている。なお、復鼎と復尊の銘末には、白川静により殷王族の図象記号だ¹⁶という非子¹⁷形がついている。

IM54〔第一図1、図版2〕は小腿骨及び脚部に寶貝が廣く分布しているが、衣服の腰から裾にかけて綴じつけられていたものか、寶貝を綴じつけた膝掛けのようなものを遺骸の腰から下にかけて名残かと思える。これに対して、ⅡM253〔図版4〕から出土している圜方鼎、圜簋蓋、圜甗、圜卣はいずれも同じ内容の銘「王率¹⁸成周。王易圜貝。用乍寶罍彝」をもち、圜簋器底銘は「白魚乍寶罍彝」とあり、蓋と器で作器者を異にするのか、圜と白魚＝伯魚＝魚伯＝圜伯は同じなのか興味深い、同時期に作器されたことを示しているが、周王から成周で祭祀が行われた

際に寶貝を下賜されたことをいう。なお、同出した董鼎には、匱侯に命じられて董は宗周で太保（召公奭）に饌し、その働きに対して太保から董に寶貝を賞賜されている。圜と董のどちらをⅡM253の被葬者とするかについては、同出の圜銘の青銅器の多さ（董銘の簋が1件に対し圜は4件）と、周王から寶貝を下賜された圜に対し、太保から寶貝を下賜された董とのランク差を考慮し、被葬者の名は圜であると判断した。なお青銅器の器形から見ると西周ⅠB期のもので両者に差は見られない。この墓からは寶貝の出土はない。周王や太保から寶貝を下賜されたことを記念して祖先神を祀る彝器を製作しているのに、肝心の寶貝はどこへいったのだろうか。東半分が崖の下になっているということから、墓の全容がまだ明らかになっていないと考えるべきかも知れない。Ⅰ区の墓の被葬者が匱侯を主人とするのに対して、Ⅱ区の墓の被葬者も主人を匱侯とするのは同じとしても、直接周王と接することのあったことを明示しており、両区の墓に葬られた人々の性格の違いを明示していると考えられよう。一方、ⅡM251〔第一図2、図版3〕は伯矩（伯丁庚）の墓か銅器は父甲（戈）、父乙、父戊（伯矩、单子）、父辛、父癸、文祖など一墓からにしては、祭祀の対象がばらばらである。作器者は伯矩がいがいにも单子、戈、麦、庶の可能性もある。このように一墓から多数の作器者の青銅器あるいは多数の祭祀の対象者（父□）が出土するのは、銅器が寄せ集めの物だということを示しているのだろうか。鬲銘によれば、伯矩は匱侯から寶貝を賞賜されている。觶には同じ器形のものがあり、銘によれば公中より貝を賜ったこと、公中（公仲）が庶に貝十朋を賜ったことがそれぞれ記されている。公中と伯矩の関係はわからない。他の銅器には貝の賜与のことはない。墓からは棺内の足下に多数の寶貝がおかれており、また二層台上にも首飾りを構成していたのか大量の貝が認められる。これらの寶貝のなかに伯矩が匱侯より下賜された貝や公中との関係で手に入れた貝も含まれているのかも知れない。

表1にも貝の有無については触れたが、寶貝の出土状況について、その他の墓の様子を見ておきたい。ⅠM26は水晶玉1と貝数枚を掌中にする。ⅡM254は口中と掌中に貝数枚。ⅠM1は口中に貝数枚。ⅠM21は棺内脚部に貝数枚と二層台上の殉葬者は貝3枚を口中にする。ⅠM22は腰坑内の埋狗の頸に貝1枚。ⅠM53は口中に貝数枚、骨盆と脚部にも貝数十枚がある。ⅠM54については先に触れた。ⅠM105は二層台上に馬具などと混じって貝が知られている。ⅡM251とⅡM253も触れた。ⅡM401は骨盆と脚部に貝数枚。ⅠM20は口中と脚部に貝数枚。ⅠM50は口中に玉環1と脚部に貝数十枚。ⅠM58は腰坑内の埋狗の頸に貝1枚。棺内人骨の頸部と脚部に貝数枚。ⅡM201は棺内中部と南部に貝数十枚。ⅡM203は棺内東南隅に貝数枚。ⅡM205は棺内中部に貝数枚。ⅡM264は脚部に貝数枚。ⅠM52CH1、ⅠM52CH2、ⅠM53CH、ⅡCHなどの車馬坑からは寶貝の出土はない。

中期とされたⅠM6では填土中の埋狗の頸に銅鈴と貝1が、棺内人骨の口中と足部に貝数枚があり、槨内頭上にも多数の貝が見られる。ⅠM19は脚部に貝数枚。ⅠM51は槨と棺の間に貝数十枚、棺内胸部に貝数十枚。ⅠM60は口中に貝数枚。ⅡM339は頭部と頸部に貝数枚。



第一图 西周时代墓葬

- | | |
|----------------|------------------|
| 1 琉璃河燕国墓 I M54 | 2 琉璃河燕国墓 II M251 |
| 3 宝鷄漁国墓BZM 4 | 4 宝鷄漁国墓BRM 2 |
| 5 北趙晋侯墓M31 | 6 北趙晋侯墓M62 |

西周晩期とされた I M13は口中と脚部に貝数枚。I M17は口中に貝数枚。II M267では口中、骨盆、脚部に貝数枚。II M268は頭部に貝1枚。II M298は口中に貝数枚あり。

すでに指摘されているように、I区とII区では墓のあり方が違うようだ。I区では大部分の墓の墓壙の填土中から殉狗1頭が出土し、また棺の下には腰坑が掘られ、埋狗1頭が入れられている。陶器や青銅器の副葬以外に牛腿骨など獣骨の副葬が目立つ。殉葬者はII M202の南墓道の東壁の龕に頭骨が発見されたのを除くと、すべてI区の墓に限られている。燕国では貝の副葬はI区では、中型墓、小型墓を問わず西周早期から西周晩期まで、貝を口中に含んだり、手中にしたり、盆骨の付近や足下に置いたりしている。多くの墓が銅戈や銅劍を伴っていることより、戦士階級の人々である可能性が高い。そのありようは、安陽の殷墟期の小型墓の状況と同じである。これらの特徴から見て、被葬者が殷の遺民達か、殷系の人々であることを示している可能性は高いと思える。

II区の墓でも貝を口中にしたり、盆骨や脚部に置いているものも見受けられるが、その例はI区の墓に比べて少ない。殉葬者は先に触れたようにII M202以外に認められず、腰坑をもつものも少ない。II区には召公奭の墓ではないかと考えられている4道の墓道をもつ墓（西周代の墓で4道の墓道をもつ墓の発見はこれが始めてである）も発見されており、周族の出自の人々の墓である可能性は高い。

また男女の性別の差によって寶貝の取り扱いが異なっているだろうか。人骨は図示されていても琉璃河の報告書では、性別がほとんど記載されていない。性別が明記されているのは3例だけである。それはI M22、I M52、I M54のいずれも殉葬者である。これらの性別の判明している人物の副葬品の中で、性別の差を示すものが存在するかどうか検討してみた〔表1〕。

I M22の殉人は13~14歳の男子で推定身長1.42mと記されている。この男子に関連深い副葬品としては、身辺に銅車馬器（当盧2、馬鏃2、馬銜1、車轄1、節約4）銅鏃11、及び銅泡、圓形蚌飾、蛤蜊殻があり、頸部には石串珠が一串（既に散乱）副葬されていた。

この状況は、車馬坑 I M53CHにおいて殉馬6頭、殉狗2頭と共に葬られた人物（推定身長1.46~1.50m）の副葬品の様相と似通っており、I M22の殉葬者はI M53CHの人物と類似する性格を持つ人物と考えられる。

I M52では足もとの二層台上の殉人は報告書に12歳の男子少年、身長は推定1.44mと記されている。この少年は銅矛を頭部近くに副葬している。

この状況はI M53の頭をそれぞれ北と南に向けた二人の殉人が、副葬品としてそれぞれ劍と矛、劍と戈を持っている状況と類似しており、いずれも侍衛としての性格を持つものと考えられる。

I M54においては、墓の両サイドの西と東にそれぞれ一人ずつ殉葬者が埋葬されており、両者とも頭を南に向けている。西側の殉人は、17歳の女性で、推定身長1.58~1.62mと報告されており、頭上には蛤蜊、頸部には石串珠、膝には銅魚形佩（5件）が副葬されていた。東側の殉葬者

表1 琉璃河燕国墓葬一覧表

時期	被葬者		殉葬者		推定身長(m)	性別	推定身長(m)	性別	葬者		推定身長(m)	性別	年齢	副葬品	備考
	墓葬番号	推定身長(m)	性別	副葬品					推定身長(m)	性別					
	II M202		男(老人)												ある時期の匿侯か?貝あり。
	II M202CH														
	I M26	1.66	男?	陶鬲1 陶甗2											腰坑あり。貝あり。双手中。
	I M52	1.72?	男	鼎1 鬲1 陶甗1	1.44	男	12	銅矛							被葬者の名は「復」。貝あり?
	I M52CH1														
	I M52CH2														
	I M53	1.63~1.63	男	銅鬲1 陶鬲5 陶甗1	1.12	男?(北)	13~14	銅戈・銅劍・盾							被葬者の名は「攸」。貝あり。西周中期か? 口中に貝、骨盆と脚部にも貝数十枚
	I M53CH				1.22	男?(南)	9~10	銅劍・銅刀・銅矛・盾							御者ではないか? 図面計測1.46m
	I M54	1.50	女	鼎1 鬲1 陶鬲12 陶甗5	1.50	男	17	蛤蜊・石串珠・銅魚飾							盤に「亞姜妃」銘あり。腰坑あり。貝あり。
	I M105	1.48	男	陶鬲1 陶甗3	1.42	男?	15前後	蛤蜊							小腿部および脚部。
	II M251		男	鼎6 鬲2 鬲4 陶鬲1	1.46	男?		一方は車馬具、一方は盾と銅戈か?							腰坑あり。貝あり。
西	II M253		男(老人)	鼎6 鬲4 鬲2 陶鬲1											被葬者の名は「伯矩」。棺内足もとに大量の貝が堆積。棺槨の間に貝の首飾り
周	II M254	1.76	男	陶鬲1 陶甗1											被葬者の名は「圉」か「薑」。墓の銘文「伯魚」は「圉」と音通するか
	II M401		不明	陶鬲1											貝あり。口中と手中。
	II CH														貝あり。骨盆と脚部。
早	I M1	1.76	男?	陶鬲1(破損)											腰坑あり。貝あり。口中。
	I M3	1.62	女?	陶鬲1											腰坑あり。
	I M20	1.76	男	陶鬲2 陶甗1											腰坑あり。貝あり。口中と脚部。
	I M21	1.41?	不明	陶鬲2 陶甗1	0.74			口中に貝							貝あり。脚部。腰坑あり。
	I M22	1.75?	不明	陶鬲2 陶甗1	1.42	男	13~14	車馬具							腰坑あり。
	I M23	1.62	女?	陶鬲1 陶甗1											腰坑あり。
	I M24		不明												腰坑あり。
	I M31	1.79?	男	陶鬲2 陶甗2											腰坑あり。
	I M50	1.50	男?	鼎1 鬲1											腰坑あり。貝あり。足部。口中に玉環
	I M58	1.66	不明	陶鬲2 陶甗1											腰坑あり。狗の頸部に貝1
	I M65	1.64	不明	陶甗2											
	I M66		不明	陶甗2											西周中期か?
	I M108	1.56	不明	陶鬲2 陶甗1											
	II M201		不明												貝あり。
	II M203		不明	陶鬲2											貝あり。
	II M204		不明	陶鬲1											貝あり。
	II M205	1.73?	男	鼎1 鬲2 陶鬲1											貝あり。西周中期か?
	II M207		不明												
	II M208	1.91?	不明												人骨半分しか残らず
	II M209		男	鼎1 鬲1 鬲1 陶鬲2											西周中期か?
	II M210		不明	陶鬲1											

時期	被葬者			死者			殉葬者			備考
	墓葬番号	推定身長(m)	性別	副葬品	推定身長(m)	性別	年齢	副葬品	備考	
西周中期	II M252			陶鬲1						
	II M264	1.70?	男	陶鬲2 陶蓋1					腰坑あり。貝あり。脚部。	
	II M321		不明	陶鬲2					貝あり。	
	I M4	1.76~1.70	男?	陶鬲1 陶蓋2					腰坑あり。	
	I M6	1.59~1.53	女?	陶鬲1 陶蓋1					腰坑あり。貝あり。狗の頸と榑と棺の間。	
	I M19	1.58~1.52	女?	陶鼎1 陶蓋1					腰坑あり。貝あり。脚部。	
	I M32	1.66~1.6	男?	陶鬲2						
	I M51	1.70	女?	陶鬲4 陶蓋4		1.50?	女?		腰坑あり。貝あり。脚部。	
	I M60	1.64~	女?	陶鬲3 陶蓋2					腰坑あり。貝あり。口中。	
	II M339	1.60~	女?	陶鬲2					頸部と頸部に貝あり。	
	I M13	1.60~	不明	陶鬲2 陶蓋3					腰坑あり。貝あり。口中と脚部。	
	I M17	1.62~	女?	陶鬲2 陶蓋4					貝あり。口中。	
II M266		不明	陶鬲1					貝あり。		
II M267	1.68~1.62	男?	陶鬲1					貝あり。口中。骨盆と脚部。		
II M268	1.72~1.70	男	陶鬲1					貝あり。頭頂に1。		
II M296		不明						貝あり。		
II M298	1.60~1.64	女?						貝あり。		
II M341	1.60~1.56?	女?	陶鬲1					貝あり。口中。		
M1009		不明								
早期	M1021		不明	陶鼎1						
早期	M1022	1.60	女?						手中に貝3、足上に貝4	
早期	M1026		男?	鼎1 蓋1					「區侯舞戟」「侯」の銘出土	
早期	M1029		男?	陶鬲1						
早期	M1043		男?							
	M1046		男						貝あり。	
晚期	M1055		男?						貝あり。	
早期	M1093		男?	陶鬲1						
早期	M1116		不明	陶鬲1						
早期	M1124		不明	陶鬲1						
早期	M1193		男						被葬者は區侯克か召公爽。貝あり。	

表2 昌平白浮墓葬一覽表

時期	被葬者			死者			殉葬者			備考
	墓葬番号	推定身長(m)	性別	副葬品	推定身長(m)	性別	年齢	副葬品	備考	
中期	M1		男(老年)						小玉璧1件出土	
中期	M2		女(中年)	蓋1 陶鬲1					槽円形腰坑あり。ト骨	
中期	M3		男(中年)	鼎1 蓋1 陶鼎1 陶鬲1					槽円形腰坑あり。ト甲・貝出土	

は性別、年齢共に報告されていないが、頭の上に蛤蜊が置かれていた。この殉葬者は副葬品からみて、女性の可能性が高い。I M53の南北に埋葬されていた二人の殉人達が、長兵としての戈や矛と盾を持ち、腰にはそれぞれ剣を持っており、男性少青年衛士と見られる殉葬者であるのとは対照的であり、このI M54では殉葬者は共に女性であり、武器の戈や矛を持たないことから考えて、主体の被葬者も女性である可能性が高い。

続いて各墓葬の殉葬者の埋葬状況から性別が判断できないか検討してみた。

I M21の殉人は刎刑をうけているのか、下肢骨を欠くようである。残長は74cmであるが、下肢骨の長さを45cmと推定すると、身長は119cmほどになる。殉人の口内には含貝3枚、他に副葬品は見られない。

I M105では副葬品は頭箱に収められ、墓の主人も、東の二層台上に重なるように葬られた殉人二人も副葬品を一切持たない。頭箱の中の副葬品を整理し直すと車馬器（当盧4，角鏃6，銅鏃4，節約）等と銅戈（3件）盾飾（2件）、各種銅泡に分かれる。殉葬者のうち一名はI M22やI M53CHにおける殉葬者と同じく、車馬に関係する人物であり、もう1名はI M53の武装した侍衛と同じような性格を持つものではないか。殉葬者2名はともに、推定身長から考えて、男性少青年と想定する。

表1には図面から推定可能な身長と副葬品や殉葬者の性別を参考にして、琉璃河燕国墓葬の男女を検討してみたが、被葬者が確実に女性だと言い切れる自信はない。孟憲武は河南省安陽殷墟南区の墓を分析して、殷代後期には男女の異穴併葬墓が1/3存在する事を報告している¹⁷が、この場合は男性が俯身葬、女性が仰身葬という特徴が認められている。燕国の墓葬は被葬者は北ないし北北東を頭位方向とする仰身直肢葬が基本である。男女の性別による墓の構成の検討、寶貝の取り扱いを含む副葬状況の違いの問題など多くの興味深い項目は、調査時あるいは報告時の性別の判定によることが多いと思われ、この点への注意をお願いしておきたい。

後に述べる山西省で発見された晋侯墓地では、ある時期から棺飾の一部として用いられたと思える寶貝の副葬状況が認められるが、知り得た限りでは、燕国では棺飾として用いられたと推定できる寶貝の副葬状況は認められない。晋国の例が晋侯と晋侯夫人という諸侯クラスの人物達の墓であるのに対して、燕国の場合は、匱侯や周族の貴族あるいは殷の遺民たちのなかの有力貴族階層を一部に含む（北京市文物研究所の陳光は、「西周燕国文化初論」のなかで、琉璃河の墓葬を分析している¹⁸）とはいうものの、主力が戦士階層である人物達の墓からなるのとは階級を異にしており、そのことも寶貝の取り扱いの相違が認められる原因ではあろう。

また燕国墓地では晋侯墓のような夫妻併葬墓は見られない。

なおここで、北京昌平白浮¹⁹の西周時期の墓葬についても少し触れておきたい。

M2〔図版13・表2〕は長方形堅穴土壙墓、1槨1棺、腰坑あり。腰坑内に埋狗1。中年女性が仰身直肢で葬られており、頭北足南。大量の武器・武具・車馬具が副葬されていたが、彝器は

簋1件と壺1件で壺は林の西周ⅡB期である。剣にオルドス式短剣を含む。卷首刀は河南省洛陽林校車馬坑出土²⁰のものに似ている。甲骨を副葬する。M1〔表2〕はM2の西、M3の北に位置する長方形堅穴土壙墓で槨や人骨はほとんど朽ちていて一老年男性と判断されているだけ。副葬品も小璧のみ。時期は不明。

M3〔図版14・表2〕はM1の南5mの位地にある長方形堅穴土壙墓。1槨1棺。腰坑あり。頭北足南で仰身直肢の中年男性と判断されている。鼎1件、簋1件、陶鼎1件・陶鬲1件をふくめて大量の武器・武具・車馬具を副葬している。帯字ト甲を副葬する。剣はオルドス式短剣からなる。戈は殷系のものからなる。山字形の内を持つ鉞は洛陽林校西周車馬坑から出土したものと共通する。寶貝がすくなくとも4枚、盾飾りや当盧の近くに見える。鼎は林の西周ⅡA期かと思う。

白浮は居庸関に近い朔北から異族の進入を制限する要衝を占める。被葬者は匱侯支配下の殷系の有力な軍人あるいは武官であったかと考える。M2と他のいずれかを異穴併葬墓とするかどうかは保留しておきたい。

Ⅲ

強国の墓葬²¹は周原や宗周から蜀の国への喉首を扼する渭水の南北岸にある。南岸の茹家荘と竹園溝、北岸の紙坊頭で墓葬が発見された。副葬品には武器、武具の類が多く認められ軍事的性格の強い一族であったことを示している。『周礼・春官・宗伯』では、都城の北か東に墓（公墓・邦墓）を造るといふことらしい²²が、宗族墓の一部が明らかになっただけである。宝成鉄路に沿った渭水北岸の紙坊頭では、BZFM1〔図版15、表3〕の1基しか発見・調査されていない。四耳方座簋と双耳方座簋にそれぞれ「彊白（伯）乍寶罍毀（簋）」とあったことより、一代の彊伯の墓と考えられている。青銅器群より見て西周前期の墓である。渭水北岸に勢力を占めていた矢伯や夬の銅器が副葬されていることより、両者の交流が窺える。ただ墓ははやくに窖洞で破壊されていて、構造や副葬品の配置状況はわからない。

同じ渭水南岸の竹園溝では22基の墓が発見されている。竹園溝の墓群は、丘陵の高い方から低い方に向かって順次埋葬され、低い方が時期が新しくなるようである。一部に西周中期のものも含んでいると考える。墓葬の方向は東南から西北を基本にしている。いずれの墓も腰坑はない。また妾に比定された人物を主人と同一の槨内または同一の墓壙内に殉葬するのは、西周代の墓葬で他に例がない。

BZM13（鼎7・簋3）〔図版16、表3〕は銘に「強」を持つ銅器はないが、妾（鼎2・簋1）を同じ槨室内に殉葬していることより、BZFM1やBZM7やBZM4と同じか、それ以上のクラ

スの人物の墓である。主人側に副葬された青銅器には7種類の族徽と思える図象記号が見られ、祭祀の対象を異にする（父辛・父癸・父乙）ことから、これらの青銅器は生前の墓主人と交流のあった氏族より贈られたか、周王より下賜されたか、どこかから奪ってきたかなどが考えられる。交流の活発さを示すものとするのが穏当であろうか。青銅彝器の器形と銘文から見れば、青銅彝器は特定の人を祭るために特定の時期に作器されたものでなく、寄せ集めであることを示している。

寶貝の副葬は主人の方にみられ、内棺と外棺の間の頭側と右手側に一組20枚が散布した状況であった。どの貝も背の半分近くまですり磨かれて平になり一大圓穿を呈している。この種の加工され磨かれ平らになった貝は竹園溝墓地ではわずかにこの一例しかない。首飾りの類のものであろうか。燕国とは明らかに貝の扱い方が異なっている。腰坑も埋狗もない。燕国墓地とこの点も大きく異なる。

BZM7〔図版17、表3〕は「白（伯）各」の銘を持つ尊と盃が出土している。「乍寶彝」銘の簋も同じ作器者であろうか。一代の彊伯（各＝名）の墓であり、編鐘3件を伴うことや馬坑の存在からも勢力の大きかったことを窺わせる。同じ墓壙内に妾（鼎1・簋1）が殉葬されている。「帚（婦）寇」の銘をもつ小方罍を伴っており、寇は女性の出自の氏族を示しているものであろう。寶貝は妾の頭部の槨と棺の間に9枚散布した状態で発見された。BZM13の貝のありようと同じといえよう。背に全て小圓孔があり、佩飾の類であろうか。

BZM1〔図版18、表3〕は男性と思えるが、玉貝1が出土している。墓は農民による耕作で破壊されており、出土状況その他は不明である。出土している陶鬲は関中地区で常に見受けるものであり、尖底罐は四川の早期蜀文化との関係が濃厚なものであり、馬の鞍型口縁をもつ双耳罐は寺窪文化安国類型のものだという。彊氏一族の出自を窺わせるものといえよう。

BZM4〔第一図3、図版18・19、表3〕も同槨内に妾を伴う。主人（鼎4・簋2）の青銅彝器は6種類の族徽を含み、中に寶貝を運ぶ図象記号を持つ壺がある。主人は尊と盃と盤の銘文から「彊季」と思われる。「夔白（伯）」銘の觶が中に含まれる。方鼎と甗には「白乍寶彝」とあり、「彝」の字形は「夔白」觶と異なる。一代の彊伯を指すのであろうか。彊白の伯は伯・仲・叔・季の伯を指すとともに、楊寛が「西周王朝公卿官爵制度的分析」²³で、‘例えば成、康の際、公卿の官爵制度はすでに確立していた。太保、太師、太史など執政大臣は「公」と称した。その他の朝廷の大臣は、四方より諸侯が進入して卿となったものを「侯」と称した。畿内より諸侯が進入して卿となったものを「伯」と称した。’とある伯でもある。陝西省長安張家坡で発見された井叔墓群では、井叔の家族墓群で他の伯とか仲とか季の銘をもつ銅器は発見されていない。彊氏は同族の彊季をも含めた宗族墓を構成していた。彊伯の伯は兄弟の序列を示すだけでなく、楊寛の見解を受け入れると畿内の諸侯で西周王朝の卿となったものといえる。

彊氏一族の青銅器には「□乍寶彝彝」とあるのが普通で、周王や他の人物からの貝の下賜に触れ

たものはない。しかし青銅彝器の多くは、西周の王室直営工房で製作されたことを推定させる見事なものであり、彛氏一族の西周前期から中期にかけての周王室内で占めていた地位の高さを窺わせるものがある。

また、鄒衡によれば、光社文化に属するという²⁴山西に本拠を持ち、一時岐山周辺（賀家村出土）にいた八氏の族徽を持つ觶が、紙坊頭の彛伯とこの竹園溝彛季の墓からいずれも出土していることは、両者の氏族の密接な関係を思わせる。

寶貝については、主人の棺内の身体の右手横に33枚が副葬されていた。すべて一小圓穿孔を持つということから、装身具の類と思える。主人の横、二層台上に副葬された青銅器群の中には、寶貝を両肩にふりわけてかつぐ族徽を持つ壺があって注目される。その族徽を持つ氏族と実際の寶貝の管理・運搬に関係があったかどうかは確かめるすべを持たないが、同じ墓から、すぐ近くに寶貝が発見されているのも興味深い。蜀の三星堆へ運ばれた寶貝²⁵も、中原から、現在の宝成鉄路沿いに持ち込まれたものであろうか。彛国のBZM4に見られる荷貝形図象記号の族徽を持つ集団が、関係していたのかも知れない。なお外棺と槨の間の三方に蛤蜊が入られている。これは棺飾の一部であろうか。

BZM8〔図版20、表3〕では尊1と缶2は「乍寶罍彝」の共通の字形の銘をもつ。

BZM6〔図版20、表3〕棺内足下に蛤蜊9、扇形の頂点に近いところに一小穿孔、佩飾の類か。

BZM20〔図版21、表3〕内棺と外棺の間に蛤蜊6件。

BZM19〔図版21、表3〕内棺と外棺の間に蛤蜊32件。

BZM15〔図版21、表3〕は頭部に簪1、寶貝一組（3枚、どの寶貝の背にも一小穿孔あり）を口中に含む。キイロダカラガイと推定する。胸部に玉戈1、棺外に卵石2だけという貧しいもの。彛氏一族で寶貝を口中に含むのは珍しい。出自を異にするとみるべきであろうか。双手を交叉した形で腹部におく。両手を括られていたかのようにも見える。

BZM16〔図版22、表3〕の墓主は口中に寶貝一組（6枚、どの寶貝の背にも一小孔をあけている）を含む。キイロダカラガイと推定する。副葬品は少なく、玉器と骨・蚌器からなる。棺槨はなく筵の痕跡があるということから、遺骸は筵に巻かれていたものかも知れない。竹園溝墓地でも特殊な埋葬形態だという。寶貝を口中に含む風習を持つ人がBZM15・16とも副葬品が貧弱で、彛氏一族とあつかいを異にしていることからみて、後に述べるようにこれらの被葬者が女性の可能性の高い事も考慮して、殷遺の隷属身分の人たちかとも考える。

BZM14〔図版22、表3〕士身分の人物か。

BZM10〔図版22、表3〕棺内頭と足下に蛤蜊（12件と20件）

BZM11〔図版22、表3〕棺内頭と足部に蛤蜊（5件と12件）

BZM21〔図版23、表3〕墓壙の右側は崖から崩落して無い。

表3 強国墓葬一覧表

時期	墓葬番号	被葬者		葬者		殉葬者		備考
		推定身長(m)	性別	推定身長(m)	性別	推定身長(m)	性別	
早期	BZFM1		男	鼎4高2蓋5				被葬者「彌伯」。
早期	BZM13		男	鼎7蓋3		鼎2蓋1	女	貝1組(20枚)
早期	BZM7		男	鼎3蓋2		鼎1蓋1・貝9件	女	被葬者は「伯各」。殉葬者は「婦亮」?青銅髮飾あり。
早期	BZM1		男	鼎5蓋3		鼎3高2蓋1	女	玉貝1
早期	BZM4		男	鼎4高1蓋2				被葬者は「彌季」。貝33枚。
早期	BZM8		男	鼎1蓋1				
早期	BZM6		女					
早期	BZM20		男	鼎2蓋2				青銅髮飾あり。
早期?	BZM15		女					貝あり。(口中に含む)
早期	BZM19		男	鼎1蓋1				青銅髮飾あり。
中期?	BZM16		女					墓主の口内に含貝一組
中期	BZM14		男	鼎1蓋1				青銅髮飾あり。
中期	BZM11		男	鼎1				青銅髮飾あり。
早期	BZM10		男					青銅髮飾あり。
早期-中期	BZM21		男					青銅髮飾あり。
早期	BZM3		男	鼎1蓋1				青銅髮飾あり。
早期-中期	BZM22		男?					
中期?	BZM17		女?					貝12枚。
早期	BZM2		男					青銅髮飾あり。
中期	BZM18		男	鼎1蓋1				
中期	BZM5		女					
早期	BZM12		不明					
中期	BZM9		女	鼎1錫鼎1錫蓋2				貝あり。(腹部)
中期	BRM1甲		女	鼎5蓋4				被葬者は「兒」。玉貝13枚。
			女	鼎8高2蓋5		貝殼4	女	被葬者は「強(彌)伯」。玉貝16枚。
							男	青年(門衛?)
							男	青年(門衛?)
							不明	10歳前後
							不明	10歳前後
							男	壮年
							不明	6歳前後
							男	青年(興者?)
							男	児童
							女	未成年
中期	BRM1乙		男					
中期	BRM2		女	鼎6高2蓋5		小玉珠1	男	被葬者は「井(邢)姫」。貝四組。
	BRM3		不明					
中期	BRM4		不明					貝一組。
中期	BRCH1							
	BRCH2							
中期	BRCH3							

BZM17〔図版23、表3〕

BZM2〔図版23、表3〕近代の墓により相当破壊されている。棺内墓主の下肢の裙服上に綴じつけたと推定される小銅佩飾、蛤蜊、寶貝（12枚）が残っている。

BZM3〔図版23、表3〕土階層の墓と思える。

BZM22〔図版23、表3〕村人が耕作中にすでに破壊されている。

BZM18〔図版24、表3〕棺内足下に蛤蜊7件。

BZM5〔図版24、表3〕槨と棺の間、墓主の身体の右側真横の位置に蛤蜊9件。

BZM9〔図版25、表3〕寶貝12枚が棺内被葬者の腹部に。報告者は腕飾という。みな背に一小圓穿孔あり。

竹園溝の墓には腰坑はない。寶貝を口中に含む例がM15とM16に知られる。他の場合は装身具の類といえようか。棺飾とは出土状況、出土位置からみて考えにくい。口中に含む例は殷遺といえるかもしれない。少なくとも彊氏一族のうちの階層の低い人たちであったといえる。彊氏一族は墓に腰坑を造らず、墓壙の填土中に殉狗や、壙底に埋狗を用いる風習はない。また自身達も寶貝を口中にしたり、手中にするといった殷以来のあるいは西周時代燕国の殷遺と推定される人々の再生の風習は認められない。棺と槨の間に寶貝をおいたり、蛤蜊を置く事が基本的に認められる。これらの寶貝にも再生の意味はこめられていたのではないかと考える。棺飾の初現的なものとするかどうかは保留しておきたい。

竹園溝の墓葬では、BZM13、7、4の三基の墓のように、同じ槨室内または墓壙内に殉葬されている妾の立場の人物が女性であろうという以外、男女の性別が判定されていない。人骨の残りがよくないために、図面から計測して推定する手がかりもあまりない。副葬品から男女の違いが夫人や妾に比定された人物以外に認められるかどうかを検討した〔表3〕。

竹園溝の墓の男性と思える被葬者達はすべて腰に劍、腰周辺に明器の銅戈、下肢の上には衣服に綴じつけた銅透頂泡というのが縦3列、または4列に並ぶという同じ状況を示しており、額には銅髮飾をつけていた。武人的性格を強く示していることが注意される。

男性の墓と思えるものは、額に銅髮飾をつけたBZM7・20・19・14・10・11・18・21・3をあげられる。腰に武器または武器の明器、膝前に銅透頂泡のあるBZM8・20・19・14・18・21・2・3も男性と考える。女性の可能性あるものとしては、BZM15・16・22・17・5・9・12（図版24、表3）が副葬の青銅武器をもたないことなどを目安にしたが、確証はない。あるいはBZM20（男）とBZM15（女）、BZM19（男）とBZM16（女）というように東西に縦に男女が並んで埋葬されていた可能性もある。寶貝についてみると、BZM15は貝を口中に3枚含む。BZM16は貝を口中に6枚含む。BZM2は青銅佩飾と寶貝12枚と蛤蜊26枚を裙服上に装飾として綴じつけている。BZM9では腹から腰にかけて寶貝一組12枚と寶貝の腕飾りとが認められる。

寶貝の扱い方をみると、妾を伴う人物の墓以外は、女性かと思える墓から口中に含む2例と腕

飾りの例があり、男性かと推定される墓からは、衣類の膝前の装飾にした例がある。

西周中期になると強氏の墓は渭水に近い南岸に移動している。茹家荘の墓群である。

BRM1乙〔図版26、表3〕は甲字形竪穴土壙墓で、林巳奈夫の青銅器の編年によれば、西周II A期の青銅器群からなる。被葬者は同じ槨内に妾と四周の二層台上に7人の殉葬者を伴う。西周代にこれだけ多くの殉葬者を伴う例は珍しい。鼎と簋には「強白乍自為鼎設」の銘があり、甗には「強白自乍用甗」の銘が、盤と豆に「強白自乍般豆」の銘が見られるように、主要な彝器は下賜されたり、贈られたものではなく、自分のものを自分の力で作ったということを誇示しており、勢力の極めて強大であったことを青銅彝器の銘文からも読み取ることができる。鼎8件簋5件というのも後の時代の礼の規格からいうと大きく逸脱するものと言えよう。

寶貝の副葬状況は、棺内主人の腕飾りが16枚の玉貝よりなる。キイロダカラガイを忠実に模倣したものか背に凹槽があり頂端に一穿孔がある。棺内死者の左臂と肩のところにあったため報告者は腕飾りかという。玉魚30件が主人の墓の棺内と内棺と外棺の間から出土しているが〈一池〉の棺飾とするには無理と思う。強国墓地では西周早期から中期前半の間に、支配階層では棺と槨の間に、寶貝を散布した状況が認められる。棺飾の早い段階のものと考えらるべきかどうかは難しい。燕国墓地では西周早期から晩期の間、報告されている範囲の資料からは棺飾の成立は認められない。興味深いのは乙室の棺と槨の間の頭部に近い左側から出土した銅人である。夫人墓からも女性の銅人が出土したが、やはり槨に近い棺外頭部に近い右側である。槨か棺の椁の上に挿し込んだものであろうか。その形、両手に持つ環状の形はすでに指摘されているように、三星堆のいわゆる「2号祭祀坑」から出土した巨大な青銅立人像を彷彿とさせるものがある。

なお主人と妾の槨の外側の二層台上の殉葬者〔表3〕のうち、墓道の入口に近いところで発見された身体をバラバラにされた人物の肢骨の周りで寶貝4枚が見られる。鑑定の結果、青年女性ということで、竹園溝M16やM15の口中に寶貝を含んでいた人たちと同じような出自の人物かも知れない。

BRM1甲〔図版25、表3〕はBRM1乙の妾と考えられている。同じ槨内に棺を設けている。鼎5件簋4件という数の上からはたいしたものである。鑄造はよくない。いずれも口縁に「兒」の銘をもつ。強伯に女性を贈った氏族の族徽かと思う。相当強力な在地の氏族だったのだろう。寶貝に関係するものとしては主人の腕飾りと同じような、玉製の寶貝13枚からなるものが女性の右手部位から出土している。青玉で背に凹槽があり、いずれも穿孔しているのは主人のと同じである。主人とこの女性のものをセットでいつか誂えたものであろう。女性は右手、主人は左手に揃いの寶貝を模倣した青玉製の腕飾りを身につけて葬られている様子は、生前の両者の親密度を思い浮かべさせるものがある。寶貝に込められていた再生の思想は、彼らには十分理解されていたと思える。玉製の寶貝は殷墟の婦好墓でトルコ石製のものが知られている。甘肅馬廠期には中期から石製や骨製の貝も知られていることは先にすでに論じた²⁶。

BRM2〔第一図4、図版27、表3〕は、BRM1乙の強伯の夫人である。1槨2棺。二層台上に男女各1名の殉葬者を伴う。鼎に「強乍井姫用鼎」、「井姫□……強白乍井姫用鼎設」とあり、甗や鳥獸形尊に「強白乍井姫用□」とあることから明らかである。寶貝の副葬は四組ある。一組は頭の端の棺と槨の間に224枚が散らばっている。他は右側の棺と槨の間に74枚、141枚、111枚という具合にかたまっている。報告者はこれらの寶貝がいずれも背に一小圓穿孔をもつことから串飾の類ではないかという。

陝西省長安張家坡では、井（邢）叔墓群²⁷が発見されている。盧連成によればM152は調査された墓の中では一番古く穆王の晩期から恭王時期ではないかという²⁸。甲字形の大墓で墓道は馬坑により破壊されており、盗掘もされていたが、帶流銅鼎と帶盤鼎が各1件残っていた。帶盤鼎には「井叔乍…」の銘がある。これと非常によく似た帶盤鼎が茹家莊のBRM1乙、すなわち井姫の主人の強白の墓から出土している。これには銘はない。林巳奈夫の編年によれば、西周ⅡA期のものである。

M152の次の代の井叔の墓と考えられている張家坡M170は甲字形大墓で、右横に小型の甲字形墓M168と併行している。M170も盗掘されていたが「井叔」方彝や林の長刀と呼ぶ武器などが残っていた。方彝は陝西省郿県出土の盃方彝（林編年では西周Ⅱとなるが同出の文様の同じ盃尊は西周ⅡB期）と非常によく似たものである。長刀は甘肅省靈台白草坡M1〔図版30〕のものと類似している。内棺と外棺のうち、内棺の四周に一串貝飾があると報告されている。

張家坡井叔M152とBRM1乙出土の帶盤銅鼎の共通するところ、また両墓出土の青銅器の年代が合うことから、強白の正妻井姫は張家坡M152に葬られた井叔の娘か、あるいはM170の井叔の娘かと想定される。井姫の墓では紙坊頭、竹園溝、茹家莊すべての強氏一族の墓のうち最も多くの寶貝が発見された。しかもその副葬状況は、強氏一族の寶貝の取り扱いとは異なり、どちらかという、張家坡の井叔墓M170での寶貝のありようと共通する。井姫は実家における寶貝の副葬状況をもちこんだものといえよう。

伝世の青銅器のうち井叔²⁹は早くには、免尊（林・西周ⅡB—ⅢA）や免簋、趯觶（咸邢叔、西周Ⅱ）に現れる。また弭叔簋（西周ⅢA）にも登場する。先の三器は金文学者によってそれぞれ穆王、恭王、懿王、孝王の各代に比定され意見の一致をみていないが、いずれにしる西周中期の周王室の有力者として井叔は登場し、儀礼の場における介添え者（右＝佑者）として活躍している。また後にも触れる盃（留）鼎では周王室の重臣として貴族間の裁判に関係している³⁰。強白は西周中期の前半に至って、早期より占めていた一族の立場をさらに強固にしたために、あるいはするために周室の重臣井叔一族より妻を娶るにいたった。

BRM3は甲字形大墓である。墓室奥の二層台上に木篋に人骨一具がある。頸部に革ひもで絞められたような跡が残っている。殷墟侯家莊西北崗HPKM1567は空墓であった。自殺した帝辛（紂王）の墓だという意見もある。この墓も一代の強白を葬るつもりであらかじめ造られていた

のか。漁氏一族が何らかの理由で滅ぼされて、最後の人物が寿陵に縊られて入れられたのか、不思議なことだ。

BRM4〔図版28、表3〕棺と槨の間に寶貝23枚が頭と遺骸の右側にばらばらと撒かれていた。むしろ棺と槨の間に寶貝を頭側と右手側にばらまくのが漁氏一族の貝を副葬する基本的なやり方ともいえるかも知れない。貝の代わりに蛤蜊を用いることもあった。しかしこれらの貝や蛤蜊を棺飾とするのは、保留しておきたい。

漁氏一族の墓は知られる限りでは、西周中期前半で終わっている。三星堆の祭祀坑の年代は、殷墟期Ⅱ期だという鄭振香の見解³¹や、C14年代測定では紀元前1500年頃と出たという見解³²もある。林巳奈夫はそれらのなかでも最も新しく西周中期説を提唱しており³³、徐朝龍もその意見を受け容れている³⁴。BRM1乙やBRM2にみられた銅人は、三星堆の巨大銅人の流れを汲むものであった。また陶器の尖底罐は四川の早期蜀文化の影の濃いものであった。三星堆文化の衰亡とほぼ時を同じくして、周原や宗周から蜀への要衝を押さえていた漁氏一族も滅びたのではないか。両者の衰退には密接な関係があったかも知れない。なお漁国墓の車馬坑からは寶貝の出土は報告されていない。

甘肅省靈台白草坡³⁵では西周時代の周とは異族の墓が九基まとまって発見されている。『春秋左氏伝』に密須の鼓とあるが、涇水流域の姁姓の密須と白草坡の間は30kmくらいである。『史記・周本紀』には「文王三年伐密須」とある。

M1〔図版30・表4〕は長方形堅穴土壙墓、腰坑あり。鼎7件、簋3件を含む青銅彝器と武器よりなる。林によれば彝器は西周ⅠA期かⅠB期のものからなる。「溧白(伯)乍寶罍彝」銘尊1件・卣2件が出土している。青銅器は族徽を異にするものを多く含み、中には商の王族の出自を示すと言われる卣子³⁶形をもつ尊がある。寶貝の記述はない。

M2〔図版31・表4〕は長方形堅穴土壙墓、1槨1棺。腰坑内に埋狗。仰身直肢葬の男性。「溧白(伯)乍寶罍彝」銘の方鼎2件・簋2件・尊1件・卣2件・盃1件を含む青銅彝器と武器からなる。「白乍彝」銘觶と爵も溧伯の作器と思える。彝器の銘はM1と異なりすべて溧伯に限られている。林は觶と盃を西周ⅠA期に、方鼎・簋・卣を西周ⅠB期とする。膝骨以下に95枚余の寶貝が出土した。

大部分の墓が腰坑を持ちそれぞれ出土状況はよくわからないがM3〔図版32・表4、以下同じ〕(寶貝15枚)・M4(寶貝1枚)・M7(寶貝9枚)・M9(口中に寶貝10枚を含む)が出土している。

初仕寶によれば、『潜夫論』には黒姓は殷王族子姓微子の後としている。溧伯一族は殷の有力貴族階層で早くに居を涇水流域に移し、康王時に新王朝の一員として受封されたものという。溧伯は溧伯の同宗だから墓地を共通にしたのであろうと。

表 4 甘肅靈台白草坡墓葬一覽表

時期	墓葬番号	被葬者		葬者		殉葬者		備考
		推定身長(m)	性別	推定身長(m)	性別	推定身長(m)	性別	
早期	M1		男	鼎7 簋3 甗1				被葬者の名は「溧伯」。腰坑あり。
早期	M2		男	鼎2 簋2 甗1				被葬者の名は「濼伯」。貝器1、貝95。腰坑あり。
中期	M3		不明					貝15。腰坑あり。
中期	M4		不明					貝1。腰坑あり。
中期	M5		不明					腰坑あり。
中期	M6		不明					腰坑なし。
中期	M7		不明					貝9、卜骨1、腰坑あり。
中期	M8		男?					腰坑あり。
中期	M9	1.4	男(少年)	陶鬲1				貝10(口含)。腰坑なし。
早期	車馬坑							M2の陪葬車馬

表 5 晋侯墓葬一覽表

時期	墓葬番号	被葬者		葬者		殉葬者		備考
		推定身長(m)	性別	推定身長(m)	性別	推定身長(m)	性別	
(西周早期~西周中期)	M9		男					武侯寧族 貝(棺飾)
(西周早期~西周中期)	M13		女	鼎5 簋4 陶鬲1				武侯寧族夫人 貝(腹部・足部)
(西周早期~西周中期)	M6		男					成侯服人
(西周早期~西周中期)	M7		女	陶鬲1				成侯服人夫人 貝一推(棺内・足下)
西周中期	M33		男	鼎・簋				厲侯福(鬻馬)
	M32		女	不明				厲侯福(鬻馬)夫人
西周中期	M91		男	鼎7 鬲2 簋5				靖侯宜臼(喜父)
西周中期~西周晚期	M92		女	鼎2				靖侯宜臼(喜父)夫人
西周晚期	M1		男					懿侯司徒(对)
西周晚期	M2		女	鼎1				懿侯司徒夫人
西周晚期	M8		男	鼎1 簋2				獻侯蘇(緡)
西周晚期	M31		女	鼎3 簋2				獻侯蘇夫人
西周晚期	M64		男	鼎5 簋4				穆侯費王(邦父)
西周晚期~春秋早期	M62		女	鼎3 簋4				穆侯費王夫人
西周晚期	M63		女	鼎3 簋2				文侯仇第1夫人
西周晚期~春秋早期	M93		男	鼎6 簋7 (内明器各1件)				文侯仇(叔家父)
西周晚期~春秋早期	M102		女	鼎4 簋5 (内明器各1件)				文侯仇第2夫人

IV

山西省天馬一曲村北趙晉侯墓地³⁶は、諸侯とその夫人が併葬された墓群がまとまって発見され、調査された貴重な事例である。侯君の墓での貝の扱いがどうかといった観点を考慮しながら検討する。晉侯墓地は周溝で囲まれていた³⁷ということである。周溝の直径は200mだという。それらを含めて700基とも1000基ともいわれる西周墓（東周墓も含むのか）が調査されたということであるが、晉国の貴族階層や戦士集団あるいは庶人の墓についてはまだ十分な報告がない。

西周中期から春秋早期まで続いた山西省天馬一曲村北趙晉侯墓地では、8代の晋侯と晋侯夫人の異穴併葬墓が調査されている。その変遷は周の成王の弟唐叔虞から数えて三代目の武侯からという。M9（武侯寧族）・M13（武侯夫人）→M6（成侯服人）・M7（成侯夫人）→M33（厲侯福・燹馬）・M32（厲侯夫人）→M91（靖侯宜臼・喜父）・M92（靖侯夫人）→M1（釐侯司徒・対）・M2（釐侯夫人）→M8（獻侯籍・蘇）・M31（獻侯夫人）→M64（穆侯費王・邦父）・M62（穆侯夫人）→M93（文侯仇・叔家父）・M63（文侯夫人）・M102（文侯第2夫人）に比定されている。M9は西周穆王頃に比定され林巳奈夫の青銅器編年でいえば、西周II A期頃になろう。

問題はM63の扱いである。中国の研究者達の間では各晋侯墓を誰に比定するかについて、少なくとも三通りの見解³⁸があるようだ。しかしそれは君を誰に比定するかという点での違いである。多くの意見がM64は7組目の晋侯で、M62とM63はともにこの君の夫人であるとしている。それは三列に並んだ晋侯墓地のなかで、最も南西にM64・M62・M63と並んでいるから、三墓を一組と考えることについてはあまり疑っていない。この点を問題にしたのは晋侯墓地の第五次調査の報告である。徐天進らの見解はM64とM62は甲字形墓であるのに対してM63は中字形墓であり、墓の規格が矛盾するのではないかということ。8組目の君M93は中字形墓であるのに、その夫人とされたM102は晋侯墓地中唯一の長方形堅穴土壙墓で、副葬品も貧弱であり不釣り合いではないかという。夫妻の墓が南北に離れているという晋侯墓のうち他には見られない状況ではあるが、M63をM93の第一夫人としてはどうかという考えである。飯島武次もその意見に同調している。いまここでは、その見解をとりいれたが、なお、副葬品その他からみてそれでよいのか、中国の研究者が普通に考えている方が正しいのかは、検討を要する。寶貝の扱いに注意して要点だけをあげる。

1. M9〔表5〕は甲字形墓、1槨2棺。仰身直肢葬の男性。槨頂南端に殉狗1。外棺蓋の南端に列をなした寶貝から成る棺飾（報告者は棺飾という）があった。また棺と槨の間には、寶貝、亀甲、包金器などが散布していた。7輛の車を殉葬。

M13〔表5〕（夫人墓）は甲字形墓。1槨1棺。鼎5件、簋4件。棺内の遺骸の腹部と足部に寶貝を副葬していた。身体の上には玉牌と珠からなる胸佩両組が置かれていた。寶

貝との関係は不明である。

2. M6〔表5〕は甲字形墓。1槨1棺。盗掘され槨・棺の状況不明。墓道に頸に銅飾と銅鈴をつけた殉狗1。

M7〔表5〕（夫人墓）は墓室と墓道の幅が変わらぬ甲字形墓、盗掘されている。1槨1棺で槨底に木炭層。棺内に残存した下半身は直肢葬で足下に寶貝一堆があった。

3. M33〔図版33、表5〕は墓室と墓道の幅が変わらぬ甲字形墓。槨と棺があるいがい不明。盗掘が激しく寶貝などの記述はない。晋侯燹馬銘の方壺「佳正月初吉、晋侯燹馬既爲寶孟則乍罍壺、用罍于宗室、用享、用考、用祈壽考、子々孫々其萬年永是寶用」1件あり。5輛の車残存。石磬10余件、鼎2件、簋1件を含む青銅器が残っていた。

M32（夫人墓）は甲字形墓。盗掘が激しく墓そのものの報告がない。銅鼎・簋などの破片と墓道中に車1輛。

4. M91〔図版33、表5〕は墓道の幅の方が広い甲字形墓。1槨2棺。頭南向き。二層台上に殉狗2、狗は頸に寶貝の串飾と銅鈴をつけている。主人は口中に顆玉と石粒60余を含んでいた。また金質帯飾6件を腰にまく。鼎7件、簋5件。晋侯燹馬の方壺蓋「佳正月初吉晋侯燹馬既爲寶孟則乍罍壺用罍于宗室用享用考用祈壽考子々孫々其萬年永是寶用」。器形不明（盤か）の底部の銘に「佳五月初吉庚寅、晋侯喜父乍朕文考刺侯寶鑑、子々孫々其永寶用」とある。編鐘7件と石磬20件近く、殉車2輛。

M92〔図版33、表5〕（夫人墓）は甲字形墓。1槨2棺。頭南向き。晋侯対鼎「佳九月初吉庚寅、晋侯対乍铸罍鼎、其萬年眉壽永寶用」が1件、晋侯燹馬圓壺「晋侯燹馬乍寶罍壺、其永寶用」が2件、晋侯喜父盤「佳五月初吉庚寅、晋侯喜父乍朕文考刺侯寶盤、子々孫々永寶用」1件が出土している。槨室東南角に銅魚・石圭・石魚・寶貝・蚌泡などからなる棺飾があった。数量の報告は無い。棺内の墓主の胸腹部に掛けられていた四珩四璜連珠玉佩の両先端には玉貝が各1つつけられている。

5. M1〔図版34、表5〕は甲字形墓で、槨頂と槨底に木炭層あり（澧西井叔墓M170で墓底にのみ認められている）。2槨1棺とある。盗掘されている。晋侯対鼎・盨・盤・匜が出土しているという。尖端が二等辺三角形を呈し、長胡二穿の戈が出土している。槨内四周から銅魚42件・石魚48件出土。寶貝の記述はない。

M2〔図版34、表5〕（夫人墓）は甲字形墓で、槨の四周を木炭で包んでいる。20歳ぐらいの女性という。盗掘が激しく銅魚36件・石魚14件は盗掘坑からの出土で原位置を留めていない。寶貝の記述はない。

6. M8〔図版34、表5〕は92年8月に盗掘された。甲字形大墓。槨室外を厚い木炭層で満たしている。1槨1棺。槨室の東西両側に、大石戈2・小石戈・小銅魚若干からなる槨飾（槨外壁の内側に位置するから棺飾というべきであろう）がある。「二池」の棺飾であろう

か。寶貝の記述は無い。黄金の帯飾が1組ある。玉器には飯含があるという。どれが相当するのは図示されていない。晋侯蘇鼎「晋侯蘇（蘇）乍寶罍鼎、其萬年永寶用」1件。晋侯斲簋「隹九月初吉庚午、晋侯斲乍函斲、用享于文祖皇考、其萬億永寶用」2件。晋侯斲方壺「隹九月初吉庚午、晋侯斲乍罍壺、用享于文祖皇考、萬億永寶用」2件・兔尊3件・晋侯蘇編鐘「年無彊子々孫々永寶茲鐘」2件（後に14件が発見された）が出土した。92年12月に上海博物館の馬承源館長は香港中文大学の張光裕教授の助力を得て、香港の骨董店から14件すべてを回収する事に成功した。16件揃った銘³⁹は刻銘で「隹王三十又三年、王親遙省東國、南國、……、王親令、晋侯蘇率乃師…伐夙夷……」と周王に従って東國、南國に遠征し夙（宿）夷を攻めて晋侯蘇は大功をたて、王より成周の大室で駒四頭を下賜された。さらに日をあらためて柶鬯一卣、弓、矢百、馬四匹を下賜され其れを記念してこの編鐘を作ったことを記している。西周晩期の王で在位が三十年を越えるのは厲王か宣王であり、金文学者の間で意見が別かれているが、馬承源は厲王説（厲王33年=B.C.846）をとる。なお李学勤は晋侯蘇すなわち晋献侯が晩年に、若い頃厲王に従って夙夷を攻めて大功をたて面目を施した事を記念して鐘に刻んだ⁴⁰とする。他には西周早期に比定された「鑄(?)侯乍旅彝」銘爵が出土している。蘇（蘇）は『世本』及び譙周の『古史考』によれば晋の献侯の名。晋侯墓地の歴代晋侯を確定するのに一番重要な資料を提供した墓である。

M31〔第一図5、図版35、表5〕（夫人墓）は未盗掘である。甲字形墓。卵石と木炭と土を用いて二層台をつくる。槨底・槨頂にも木炭層がある。1槨3棺。鼎3件・簋2件。遺骸の下、背の部分から出土した玉環に「玟王ト曰我罍□人□伐真人」の銘あり。報告されている平面図によれば、槨の内側東西に銅魚（東70件・西45件）・寶貝（東12件・西9件）・銅鈴7件が点在している。「二池」の棺飾であろう。

7. M64〔図版35、表5〕甲字形墓。1槨2棺。槨の四周に積石、上下に木炭。棺内頭北向きで仰身直肢、未盗掘である。槨壁の東西内側にはすでに散落しているが、銅魚・蚌貝・銅鈴などを掛けていたという記述がある。「二池」の棺飾であろう。金帯飾。5鼎4簋。鼎のうち2件は晋侯邦父銘「晋侯邦父乍罍鼎、其萬年子々孫々永寶用」あり。簋は4件とも「隹正月初吉、龠休乍朕文考叔氏罍斲、休其萬年子々孫々永寶用」の銘あり。楚公逆鐘（鑄銘）「隹八月甲午、楚公逆子祀厥先高祖考、夫壬四方□、楚公逆出求、厥用祀四方、□休多禽□□内饗、赤金九萬鈞、楚公逆用自乍、和□錫鐘百□、楚公逆其萬年、□用保□大邦永寶□」8件と方壺2件。

M62〔第一図6、図版35、表5〕（夫人墓）は甲字形墓。盗掘されていない。1槨2棺。填土に木炭の屑が混じっている。槨室の内側の東西両側に銅魚・蚌貝・小石圭600余が散乱していた。もとは槨飾（棺飾というべきであろう）であったと記述がある。「二池」の棺

飾であろう。鼎3件簋4件ほかの青銅器。器形は小さくて薄く明器の類と思える。玉牌のうち銘をもつものがあるが、磨り消されてよく読めない。

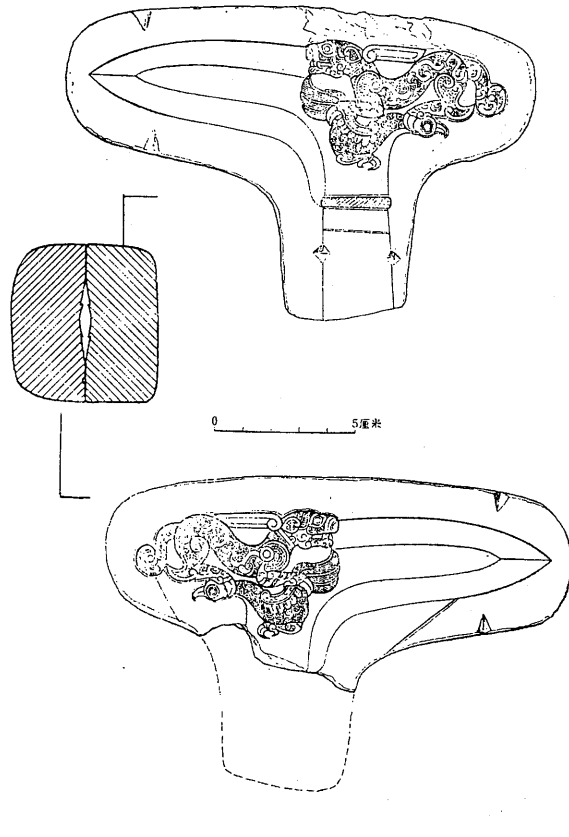
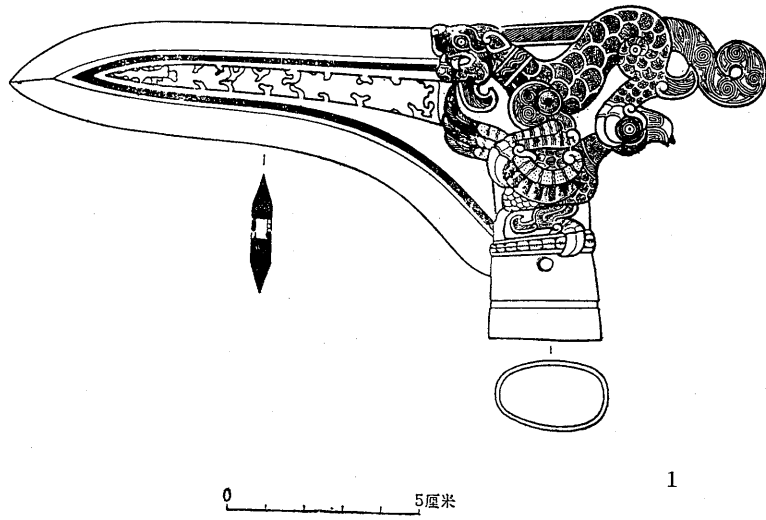
8. M93〔図版36、表5〕は中字形墓。墓壙底では3条の石積とその間を木炭が埋め槨を支えている。槨の四周も石積と木炭で満たし、槨頂も木炭で覆う。M63の構造と共通する。1槨2棺。頭北向き。墓主は口中に玉龍形飾1を含む（数個に割れていたが1個になった）。編磬10件、編鐘16件。

棺槨の飾りは銅鋪首8件。銅鈴23件は分布に規律がある（槨の東側に3件、西側に4件、南側に7件、北側に9件）・銅魚は330余件が槨の四周に分布（東側30余件・北側140余件・西側30余件・南側110件）。その間に少量の蚌質管状飾件と少量の蚌貝がある。もともと‘荒帷’上の飾件であろうという。「四池」の棺飾であろうか。そうだとするとランクを越えたものといえるが。実用銅器は鼎5件、簋6件。「晋叔家父」方壺「晋叔家父乍罍壺、其萬年子々孫々永寶用享」2件。盤2件も銘があるが鑄でよめないとのこと。明器鼎1件簋1件を含む青銅器。南墓道及び祭祀坑から大量の狗骨や馬骨が出土している。南墓道東側のM97とM98は副葬品をもたないかあるいはほとんど持たず、屈葬や俯身葬であり、人祭の可能性が高い。

M63〔図版36、表5〕（第一夫人墓。墓の組み合わせと、墓主については見解を異にする人もいる）は中字形墓。墓底に石層と3道の石梁を設け、木炭で満たし槨をその上に設ける。槨の四周と上方も木炭で覆う。1槨2棺。頭北で仰身直肢。槨飾は銅魚・蚌貝など槨室の両側に見える。とある。「二池」の棺飾であろう。鼎3件簋2件と「楊姑乍羞禮壺、永寶用」銘銅壺2件。玉戈に銘「邑凡白（伯）弓」あり。「楊姑」の壺については贗器かどうかを含めて曹定雲ほかの議論⁴¹がある。器形は近年出土した河南省陝県上村嶺虢国墓M2006⁴²の壺と非常によく似ていると思う。報告ではM2006を西周晩期虢国貴族夫人墓というが、盞や簋は西周ⅢB期かと思うが、鼎や甗や盃は春秋Ⅰ期と思う。M63の壺も春秋Ⅰ期と考えておきたい。

M102〔図版36、表5〕（第二夫人墓。この墓だけ長方形堅穴土壙墓）。1槨2棺。墓主人は頭北向き、仰身で右膝を軽く曲げた女性。口中に玉蚕13枚を含む。実用の鼎3件、簋4件。明器の鼎・簋各1件。21件の銅鈴が槨底の東西両側から出土（東側10件、西側11件）。ほぼ対称に分布しており、数百件の銅魚や大量の石貝と相伴っていた。「二池」の棺飾であろう。なお4件の山字形の銅飾が槨室の東北と西南に分布していた。戦国時代中山国の圓形の帳の周りをとりまいていた山字形青銅器⁴³があるが、この場合は棺または槨の四方に立てた木桿の上に差し込んだものであろう。

以上晋侯と晋侯夫人の墓から寶貝の副葬状況を見てみると、M91までは、夫人の遺骸の身近に副葬されたり、殉葬された狗の頸につけられている。これは殷墟で見られる商代後期の寶貝の取



第二图 春秋晚期晋国青铜武器与铸型

1 太原晋国赵卿墓出土铜戈 (M251:287)

2 侯马铸铜遗址出土戈范 (PXH:02)

り扱いと同一範疇にある。しかしM92から以後は棺の飾りとして銅鈴・銅魚・石魚・石圭などと共に時に真貝が、ほとんどの場合は蚌から作った蚌貝が出現し使用されている。基本的に晋侯も晋侯夫人も「二池」が棺飾として用いられている。ただ春秋早期の文侯仇だけ周王に匹敵する「四池」の棺飾を用いたと推定される。口中に含まれる啥もM91では顆玉と石粒60余、M93では玉龍形飾1、M102では玉蚕13というように寶貝が含まれることはなく、玉が主流を占めている。この傾向は春秋晩期晋国の実権を握った趙鞅（B.C.540-B.C.475）の墓に比定された山西省太原晋国趙卿墓⁴⁴でもみられ主人は口中に玉塊を含んでいる。山西省侯馬市上馬墓地⁴⁵では西周晩期から戦国初期までの時期の墓1373基が調査された。なかでも春秋晩期後段のM1005からは、車馬器とともに寶貝を模倣した銅貝538枚が出土した。その中には2枚の包金貝が含まれていた。M1005以外の墓から出土した寶貝はすべて骨製の貝であった。上馬墓地では琯のデータは、玉琯が春秋の初めから終わりまで主力を占めていたことを示している。

啥が玉に替わったからといって寶貝の呪力が春秋時代の晋国で軽視されていたわけでは決していない。趙鞅の棺内に納れられていた「猛虎扼鷹」罍戈〔第二図1〕に寶貝のモチーフが表現されており、侯馬新田の銅器鑄造跡から発見された多くの青銅器の鑄型〔第二図2〕にも寶貝のモチーフが表現されていることから言える。機会を改めて春秋戦国期の寶貝の役割は論ずる。

晋国では卿・大夫・士の階層で、啥は寶貝ではなく玉を用いる風習は、M91の墓主靖侯宜臼頃から始まったと言えそうだ。また『礼記』に記されるような棺飾の登場は、西周前期まで遡らず、晋国では靖侯夫人の葬儀以後始まった風習のようだ。林の青銅器編年で言えば、西周ⅡB期とⅢA期の交代期に相当すると思える。靖侯の段階に、棺飾や琯からみて侯以下の葬送儀礼が晋国では定まったものと推測される。これらの葬送儀礼に寶貝の真貝は使用されなくなっていたことがわかる。また晋国の青銅器で公表された有銘銅器の内に寶貝の賜与を銘記したものは1例もない。晋侯の自作の器が圧倒的に多いからだともいえるが、注意しておきたい。M8出土の晋侯蘇鐘では周王から賞賜されたのは駒四匹とべつに秬鬯一卣・弓・矢百・馬四匹で寶貝は無い。北京大学のサックラー記念博物館に展示されている晋国墓M6241⁴⁶は1槨1棺、被葬者は成年女性で寶貝を頭飾に用い、さらに下半身に寶貝を縦に16列、腰みのまたはスカートのように連ねたものをまとっている。そのうえ瑪瑙や玉からなる見事な胸佩飾を飾っているが、それには随所に玉製の貝が飾られている。2鼎2簋の銅器をもつことより晋国では大夫夫人または士のクラスの墓かと思える⁴⁷。銅器は林編年の西周ⅡA期（もしくはⅡB期）に相当する。葬送儀礼に寶貝の真貝と玉製の貝を併用する風習は晋国では大夫または士のクラスは西周中期の段階ですでに始まっていたと思える。晋国の侯・侯夫人の墓葬における寶貝のありようは以上であるが、金文資料で検討した寶貝が通貨の価値を本格的にもちだした時期と相表裏する動きと言えよう。その点については最後にのべる。

張家坡の西周墓地は豊京西北部の高地上、面積は約20余万平方メートル、発見されている西周墓は3000余基、ボーリング調査の結果は萬を越えると推定されている⁴⁸。西周時期の規模の大きい族葬墓で、若干の小墓区からなる。墓区の西北部に西周貴族井叔家族墓地がある⁴⁹。4座の帯墓道の大型墓、周囲に一群の中型墓と馬坑をともなっている。銅器の銘文から見ていくつかの帯墓道をもつのは、三代の井叔あるいはその夫人の墓葬と考えられている。

4座の墓葬はM157は西部、M170・M168は東部、M152は中部にある。

M157は南北墓道をもつ中字形大墓で1槨2棺。盗掘が激しい。井叔家族墓中形制・規模すべて最大。人骨の鑑定から40-45歳の男性。

M157の左右には墓道をもたない中型の長方形堅穴土壙墓M161とM163がある。西4mにあるM161は1槨2棺。腰坑内に埋狗1頭。盗掘が激しく棺と槨の間に頭骨を発見したが口中に玉珠一顆を含んでいる。残された人骨から45-50歳の女性。東側5mの位地にあるM163は1槨2棺。鄧中犧尊と井叔采鐘などの青銅彝器が出土した。人骨の鑑定から25-30歳の女性。M157は一代の井叔、名は采、M161とM163は井叔采の妻室。井叔采の夫人は鄧中氏（曼姓）の女である可能性あり。

M170は甲字形大墓で1槨2棺。棺の四周には一串の貝飾がある。墓底には一層の木炭を敷く。男性人骨出土。頭箱内出土の井叔方彝は器底と蓋内に銘「井叔乍旅彝」とある。この方彝と1955年陝西省郿県出土の盃方彝⁵⁰の器形は完全に同じである。文様中央の圓花紋は盃方彝と同出した駒尊⁵¹と同じようなもの。盃方彝の年代は郭沫若・唐蘭は懿王期、李学勤・馬承源は孝王期とする。M170の被葬者の井叔が活動した時期は懿・孝の時の可能性が高い。なお玉魚60多件とあるが、出土状況は盗掘で原位地を留めておらず、棺飾かどうか判断しがたい。総じてM170の出土器物は明らかにM157とM163の出土器物より早い。

M168はM170の西側の甲字形墓である。2mしか離れていない。両墓は並列している。しかも4座の帯墓道の墓のうちM168は形制最小で、総長わずかに12.1m、1槨2棺。盗掘が激しい。M168は一代の井叔であるが、規模も最小、頭箱なく、輪輿を副葬していない。年少で亡くなったか、権勢が大きくなかったからかも知れないと調査した張長寿はいう⁵²。しかし墓葬の坑位の布局と濬県辛村衛国墓地・曲村-天馬晋国墓地・茹家庄強国墓地の資料から見て、M168はM170と一対の夫妻異穴併葬墓であって、一代の井叔墓地ではないとは盧連成の意見である⁵³。

M152はM157とM170の間にある一座の甲字形大墓である。墓道はM157の附属の馬坑M153により打破されている。墓室の一角はまた中型土壙墓M165により打破されている。この墓は盗掘されており、ただ頭箱から帯流銅鼎と帯盤鼎が各1件、銅釦漆木盥3件が出土した。人骨の鑑定

結果は40歳前後の男性である。帯流鼎には「井」の銘が、帯盤鼎には「井叔乍□□□」銘がある。M152は一代の井叔であったと思える。「井叔采」鐘銘文中の「文祖穆公」はM152の井叔を指すと思える。

張家坡四代の井叔墓は西から東へM157（井叔采）－M152（井叔達）－M168－M170、M157が最早で、M152、M168 がそれに次、M170是最晩であるという見解がある（張長寿）。盧連成は張家坡墓地は三代の井叔の墓で、M152－M170－M157（井叔采）という順序、M152は中央に、M170は東部に、M157は西部にあると考える。

先にも触れたように井叔は免尊・免簋・趯觶などでは右者として登場する。張家坡M152に葬られた井叔が上述三器の井叔と同一人ではないかと盧連成はいう。

なお後にも関係してくる晋鼎〔第四図3〕は、非常に重要な銅器であるが、原器は戦火でない。唐蘭は恭王期とし、陳夢家・馬承源は懿王期とし、郭沫若・趙光賢は孝王期とした。晋鼎中の井叔は王室の重臣で、晋に赤金を下賜し、晋の訴訟をまた受理している。晋鼎中の井叔は第二代の井叔でM170の被葬者と同一人物の可能性があるという。三代の井叔墓はM152を中心にして左昭右穆に排列されている。以上のことが誤りでないなら、西周族葬墓中、すでに昭穆の排列制度⁵⁴が存在していたことになる。

『礼記・中庸』には、「宗廟の礼は昭穆を序する所以なり」とある。族葬墓地が昭穆の次序で案配されていたことは、『周礼・冢人』に「公墓の地を掌る。その兆域を弁じ、之が図を為る。先王の葬居中、昭穆をもって左右となす。」鄭玄の注に「先王の塋を為るとは、昭は左に居り、穆は右に居り、処を東西に挟む」とある。西周の墓葬群から『周礼・冢人』に記述されたような公墓・邦墓の制や昭穆の次序を明らかにするには、まだ資料の公開と分析が十分とはいえないと思う。

中字形墓・甲字形墓を含む井叔家族墓群以外は、張家坡で発見され公表されている墓はすべて長方形堅穴土壙墓である。井叔墓群から100mぐらいいか離れていないところで、1967年には西周墓124基、車馬坑5基、馬坑3基、牛坑4基を調査している。寶貝の副葬状況を墓葬の登記表⁵⁵を利用して整理してみた。

北区墓葬74基 一期 1基（貝を持つ墓1基） 二期 32基（貝を持つ墓16基） 三期 19基（貝を持つ墓12基） 四期 1基（貝を持つ墓1基） 五期 3基（貝を持つ墓1基） 六期 0基 時期不明 18基（貝を持つ墓12基）

西区墓葬42基 一期 0基 二期 4基（貝を持つ墓3基） 三期 1基（貝を持つ墓0基） 四期 0基 五期 16基（貝を持つ墓10基） 六期 14基（貝を持つ墓12基） 時期不明 7基（貝を持つ墓5基）

南区墓葬8基 二期 4基（貝を持つ墓2基） 五期 3基（貝を持つ墓2基） 六期 1基（貝を持つ墓1基）

合計すると一期（1/1）・二期（40/21）・三期（20/12）・四期（1/1）・五期（22/13）・六期（15/13）・時期不明（25/17）・計（124/78）〈但し出土墓数/貝を持つ墓の数〉。貝を持つ墓の占める率は合計でみても63%を占めている。

なお、北区のみ殉人が14基にみられ、そのうち腰坑をもちさらに貝の出土するものは9基で64%を占め、一期1基、二期4基、時期不明4基となる。

貝の出土状況はM36（腰坑あり・殉人3）では二層台上の三方の殉人のうち1人が口中に貝7枚を含んでいる。M54（腰坑あり・殉人2）では腰坑内の埋狗が貝1枚を伴っている。出土した鼎1簋（小型盃であろう）1のうち、鼎は北子形の図象記号をもつ。林巳奈夫の殷後期Ⅲ期に比定されたアーサーMサックラーコレクションの鬲鼎⁵⁶〔北子□〕と器形文様が共通する。小型盃は喀左山湾子出土の西周I期⁵⁷に似る。銅戈1をもつ殷系の土階層の人物と考える。M87（腰坑あり・殉人1）は主人の口の近くに貝とある。鼎と簋・卣・尊・觚・爵・戈などをもつ。土階層の人物と思える。卣と尊は夙の図象記号をもつ。商代の雄族の徽号である。M115（腰坑なし・殉人なし）では頭骨の近くと右足側に貝が散布した状態のようだ。なお寶貝の数量は非常に多く背に多くは一孔を穿する。M101からは16件が墓主人の口中からとある。玉を用いて貝を模倣したものも出土している。石貝は7基の墓から出土。攪乱されていない墓では多く墓主人の口中や頭部から出土している。M127では40件知られている。

1955-1957年に調査された張家坡の墓⁵⁸も検討してみた。131基の西周墓のうち75基が貝を伴っている。約57%に相当する。腰坑のある37基のうち寶貝を伴うものが22基を占める。殉人を伴う7基のうち5基が一期（1967年調査の二期に相当、以下順次ずらせる）で、そのうち2基が貝を伴う。内訳は一期（38/25、うち腰坑あるもの17、殉人あるもの5）、二期（10/7、うち腰坑あるもの6）、三期（8/6、うち腰坑あるもの1）、四期（25/15、腰坑あるもの2）、五期（6/5、腰坑あるもの1）、時期不明（44/17、うち腰坑あるもの10）となる。

なお張家坡の西周車馬坑4基はどの墓に属すかは明らかにできないが、第一期であることは確実だという。ここからは極めて大量の寶貝が出土している。籠嘴・絡頭・鞞具・轡帯などの馬飾や、車衡の両端の銅矛から垂下した寶貝や蚌飾品・轅の両側の衡の上にも一個の大蚌泡と八個の寶貝がセットで装飾として用いられている。馬飾は殷墟期の河南省小屯M164の蚌質当盧と寶貝からなるものにつながるものである⁵⁹。

張家坡のデータによると西周の本拠地の一つである豊京で、中小型の長方形土壙墓に埋葬された階層では、墓に寶貝を副葬する風習が西周早期から晩期まで通じて60%あるいはそれを越える割合で認められる。特に西周早期の段階（西周初年より成康に至る時期）に腰坑をもち殉人を伴い寶貝を副葬するという風習が強く認められる。車馬坑出土の馬飾や車衡の飾りも西周早期に属する。副葬された青銅器の図象記号の中に商代の雄族に関係するものもあるなど商滅亡後、周族に宗族ごと与えられた殷の遺民達を多く含んでいるのかも知れない。あるいは商滅亡後、周王朝

に服属した商の貴族階層が宗族の形態を留めたまま、死後、埋葬されていると思える。張家坡の西周墓群は殷墟西区で明らかにされた殷墟期の宗族墓のように、墓群と墓群の間に墓を全く作らない空間地を設けているといったようなことが明らかにされておらず、また図象記号を用いて墓群を識別する手がかりも十分とはいえない。

周族の本拠地の一つである宗周豊京の地では、寶貝の扱いはどうであったか。ここでは支配階層の上位者である井叔墓でも西周中期後半の青銅器を出土した井叔墓M170では寶貝が棺の四周に副葬されていること、これは棺飾としての扱いと考えた方がよいのかも知れない。土階層を多く含むのではないかと考えられる中小型墓群では、腰坑をもち埋狗を伴い、殉人を伴うという墓が西周早期に近いほど多く認められ、そこでは寶貝の取り扱いが口中に含ませたりする、どちらかというと殷系の風習ではないかと考える特徴を多く示している。その有り様は西周晩期まで変わらない。これまで述べてきた燕国・強国・晋国のうち、西周中期・晩期の墓の時期・クラスも含めて燕国にどちらかという一番近い状況を示しているといえる。諸侯と侯夫人を中心とする晋国の状況を用いて、西周晩期には寶貝の真貝は墓の副葬に用いられなくなったと結論づけるのは問題かも知れない。

VI

応国の墓地⁶⁰は河南省平頂山市北澁村の澁陽嶺上にある。1986年から調査を始めて1992年までに130余基の西周時代の応国の貴族墓地を発掘したという。M84は長方形堅穴土壙墓で、墓の東縁はM187によって壊されているが墓底の副葬品の状況は攪乱されていない。単棺単槨、棺北端にあったいくつかの齒から墓主人の頭は北向きである。棺頂板上や棺と槨の間には銅人面具8件が三方に散らばっていた。頭に左右に分けた長髪をもつものと、持たぬものが各4件ずつあり、強国の茹家莊墓地で発見された小銅人などと共通するものであろうか。棺内人骨口中には玉珪があると記載されている。10件出土した青銅礼器は鼎2件盃1件を含む。鼎は林巳奈夫の編年を参照すると、いずれも西周ⅡA期と思う。「応侯乍旅」の銘をもつものがある。盃は「応侯称肇乍厥不頤文考釐公隳彝……」と銘があり、西周ⅡB期のものかと推定しておきたい。というのは林巳奈夫の編年では盃とか簋の類は西周ⅢA期以後しか出現しないとされているが、文様から考えて時期がさかのぼると思う。甗は「応侯乍旅彝」の銘があり、西周Ⅱ期のものと思う。盤と盃には「乍獸宮彝永寶」とあり、盤は西周Ⅱ期、盃は西周ⅡB期であろう。尊と卣には「称肇謀乍寶隳彝用夙夕享考」とあり、ともに西周ⅡB期かとする。

M95は甲字形墓で、単棺単槨の墓葬である。図面はなく記述だけなので副葬品の配置状況はよくわからないが、蚌魚が副葬器物の間に散置しているとあり、棺飾として使用されたものと推定

される。棺内の人骨は頭骨が北向きというのが推定されるぐらいでほとんど残っていなかった。棺内のいくつかの玉片や2個の玉珠の用途は不明である。寶貝に関する記述もまったくない。鼎5件簋6件と甬鐘7件をふくむ青銅器の出土した未盗掘の墓である。鼎と簋には「公乍……」の銘をもつものがある。林巳奈夫の編年を参照すると西周ⅢA期と思える。鬲4件は「侯氏乍……」の銘をもつ。西周Ⅲ期であろう。盨と方壺と盤は「応白乍……」の銘をもつ。方壺は西周ⅢA期、盨は西周ⅢB期かと思える。報告では公も侯も応を上につけて解釈している。応は侯国であるのに応伯とあるのは、未だ侯爵を襲封していないからだという。検討する必要があると考える。

応国墓M1は長方形竪穴土壙木槨墓である。報告では青銅彝器を検討して西周末、宣王の時期と比定しているが、鼎とか戈は春秋早期のものと思える。1槨1棺で仰身直肢葬の中年男性、頭北足南。槨頂板上二層に別れた下層には銅魚(215件)、石貝(95件)、蚌貝(40余件)が槨頂板の四周に散らばっている。銅魚の分布には一定の規則性が窺えるとのことだ。骨釘(80余件)と称するものも槨頂板上、南北の対角線上に認められる。棺内の人骨は口中に玉片3件を含んでいる。鼎5件簋6件を含む青銅器を副葬している。簋や方壺には鑄型の内型の土がそのまま残っており明器と思える。

報告者によれば⁶¹、『水経注・滎水』には“汲郡古文、殷時已有応国”とあり、『春秋左氏伝・僖公24年』には“邶、晋、応、韓、武之穆也”とある。『漢書・地理志』には“潁川郡父城県応郷、故国。周武王弟(子)所封”とある。滎陽嶺は応国貴族及びその後裔の墓地で、M1はその嶺の中部に位置している。『儀礼』、『礼記』、『春秋公羊伝』、『孟子』などによれば、大夫は5鼎、5鼎4簋は下大夫の墓葬であるが、この墓は礼に合わない、僭越な状況を示しているという。

また『礼記・喪服大記』には“君裏棺用朱緑、用雜金鐻、大夫裏棺用玄緑、用牛骨鐻、士不緑”とあり、大夫は棺の裏の四面は玄(黒)色の繪(絹)を、四角には緑色の繪を牛骨製の釘で止める。牛骨かどうか鑑定されていないが、骨鐻は大夫の身分を象徴的に示すものと言える⁶²。また同じく『礼記・喪服大記』に“君…齊、五采五貝…、大夫…齊、三采三貝…”とあるが、これは例えば大夫の場合は柳車の頂蓋上面の中部を絳(真紅色)、黄、黒の三色の繪で蓋を覆い、貝串を連ねて三串としたものを繪の上面に垂らしたものであるとの見解⁶³である。柳車の柩を覆うテント風のものの軒に相当するところから吊した銅魚や石貝や蚌貝が、槨頂板の四周から出土している状況は、諸侯や大夫のクラスには合致しない。『礼記』には記載のない周王の場合に相当すると思え、ここでも礼の規範を逸脱している様子が窺える。

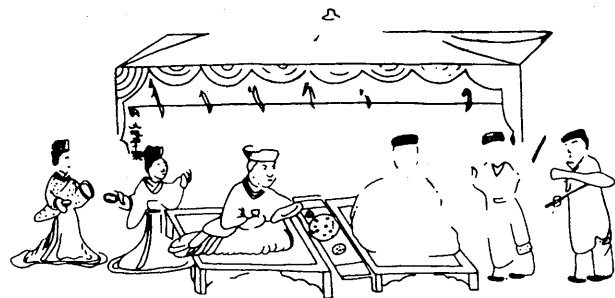
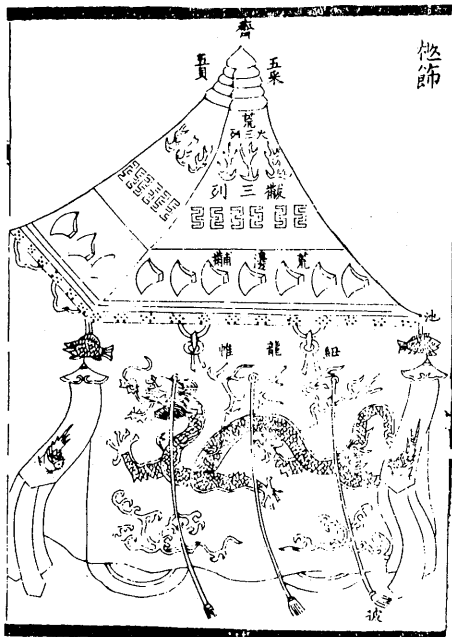
西周晩期と春秋早期の応国の諸侯あるいは大夫クラスの墓の状況は、啥に玉片を用いること、寶貝の真貝は出てこなくて、真貝を模倣した石貝や蚌貝を棺飾や槨飾に用いることなどは、西周晩期から春秋早期にかけて晋侯墓地で、先に見たのと同じ状況である。

VII

では、棺飾とはどのようなもので、どのような役割を果たしたのだろうか。

林巳奈夫によれば⁶⁴、「礼」では人が死んで棺に納め殯した後、いよいよ墓に埋葬しようというとき、車に載せた棺を飾る。これが棺飾である。『礼記』喪服大記の鄭玄注には、棺を飾るのは途中の道路や墓壙の中を華やかにして、人々が自分の親に悪い印象を持たないようにするためのものだという。また『周礼・天官』縫人の鄭玄注には「孝子は死んだ親を棺に納めて西階の上に置いて塗でぬりこんであったのを開き、棺を見るが、棺をみることに親の身を見る如くである。棺飾と共に車に載せて墓に行き、埋葬するのに当たり親が生時に帷幕〔第三図2〕の中に坐っていたのになぞらえて棺飾を作り、文繡を加えるのだ」という。

『礼記』喪服大記には諸侯・大夫・士の棺飾について記されている。それによると諸侯（君）の棺飾は“龍帷、三池、振容、黼荒、火三列、黻三列。素錦褚、加偽（帷の誤り）荒、纁紐六、齊、五采五貝、黼翬二、黻翬二、画翬二、皆戴圭。魚躍弘池、君纁戴六、纁披六”とあり、大夫の棺飾は“画帷、二池、不振容。画荒、火三列、黻三列。素錦褚、纁紐二、玄紐二。齊、三采三貝。黼翬二、画翬二、皆戴綏、魚躍弘池。大夫、戴前纁後、玄披亦如之”とある。士の棺飾は



第三図 棺飾と帷幕

1 『禮書通故』の棺飾

2 遼陽棒臺子壁画墓の画像

“布帷、布荒。一池、揄絞。纁紐二、緇紐二、齊、三采三貝、画鬘二、皆戴綏。士戴前纁後緇、二披用泗”とある。記述はないがこれらより推して天子（周王）の場合は、“四池、齊、七采七貝、八紐、八戴、八披、外加八鬘”と思えると孫華⁶⁵はいう。

鄭玄の注を基にした林巳奈夫の解釈⁶⁶によれば、棺を載せる車である「柳」は人の住居を象る。諸侯・大夫の柳車では青銅で魚形を作り、「池」の下に懸ける。「池」を荒の下端に出た骨の端についた爪に懸けた具合は、ちょうど屋根の軒端の雨樋のようである。唐の孔穎達は疏に「天子も諸侯も四注の屋根の宮室に住むが、天子は四面に霤をつけるのに、諸侯は後方の一つを除いて三つとする」と。承霤は屋根の下縁沿いにつけられた水平な雨樋であると林はいう。諸侯は三方に、大夫は二方に、士は一方に「池」を設ける。

車が動くとき銅魚は上の「池」をかする。士は銅魚を用いない。

寶貝についての記述は例えば「齊、五采五貝」とある。柳車の天辺に瓜を割ったような飾りをつけるが、その頂点と側面に寶貝をつづりつけるという〔第三図1〕。銅魚は池からぶらさがり、それに振容を結びつける。寶貝と銅魚はこの際一つらなりの装飾とはなっていないことに注目すべきであろう。

先の応国の時に触れたが、柩を覆う屋形風の覆いの棟の部分から色違いの絹布を垂らし、その上に串状に連ねた寶貝または寶貝を蚌で模した蚌貝を、クラスに応じて五方向や三方向に垂らす。晋侯墓地や応国墓地で、槨と棺の間に散布した状態で見られた寶貝あるいは蚌貝は、このような状況に、もと在ったと考えた方が、貝の数量や散布の状況を理解しやすい。強国墓地の場合は銅魚・石魚は無く、寶貝だけが槨と棺の一方あるいは二方向から出土するのも、本来屋形風の覆いの一方あるいは二方向だけに寶貝の一連ねを垂らしたものだと思えば、これらも棺飾とし得よう。しかし首飾りや胸飾り、腕飾りの類でなかったという保証はない。ただいずれの場合も、寶貝や寶貝の真貝から形を変えた蚌貝が、棺飾りに用いられたかどうかは措くとしても、槨と棺の間に散布されたのは、寶貝の持っていると観念されていた再生の思想（死後の世界での再生）を示しているものであることは、寶貝を口に含ませたり、手に握らせたりした商以来、あるいはさかのぼっては、新石器時代の馬廠期中期（陝西省寶鷄北首嶺のマクラガイを考慮すると仰韶期までさかのぼる）以来の古い再生の思想に根づくものであると考える⁶⁷。

ただ先に触れた陝西省長安張家坡の車馬坑出土の車衡の両端につく銅矛とそれから吊された寶貝のことを考えると、寶貝を部分的に銅魚などと一緒に綴じつけたことは全くなかったのかはなお検討すべきであると思う。例えば未盗掘の晋侯墓地M31号墓〔第一図5〕の銅魚と寶貝の散布状況は、銅魚は東西両側にまんべんなく見られるのに対して、いくつかの寶貝がかたまってほぼ同じような間隔をあけて棺の東側では3カ所から、西側では2カ所から銅魚と共に出土している。銅魚は「池」から吊されていたものであろう。「二池」ということになり、M31号墓の被葬者に推定されている獻侯夫人は、古典に記載された「大夫」に相当する棺飾と復元される。問題は上

に述べたような出土状態を示す寶貝を、古典に記載された寶貝のありよう（齊の上と側面に綴じつけられた）だけで解釈してよいかどうかである。発掘時の意識とか出土状況の読みとも関連すると思える。古典の読みを古人の解釈通りに読むか、現在の発掘状況を踏まえて解釈するかは別問題であろう。

林巳奈夫によれば⁶⁸飾りをつけた棺を墓に運んだ後に、棺を車から下ろし、棺飾を取り去り、棺を墓壙へ入れる。棺を壙に納めた後は用器（武器・農具類）、役器（武具）を棺の傍らに納め、見（棺飾）を加える。これを加えると棺柩は再び見ることが出来ない。墓室に納めた棺の廻りにもう一度棺飾を組み立てるわけである。生時の帷幄には環ないし璧・玨・綫・鈴などの飾りが吊るされていた。帷幄を象った棺飾にもそのような飾りが吊るされた。晋侯墓地などで鈴が見られるのはそのためと思える。

墓壙内の槨と棺の間に散布した状況で発見される寶貝は、本来以上に述べたような用途に使用されていたと思える。

VIII

西周代、青銅器銘文で見える限り、林巳奈夫の殷周青銅器編年⁶⁹の西周ⅠA期、ⅠB期、ⅡA期、ⅡB期には、殷後期Ⅲ期の商王と他者の関係と同じように、周王や周王の後、太保など西周王朝の有力者から氏族の長や有力貴族に彼等の功績を褒め称えた証（蔑曆）として、あるいは氏族の長や有力貴族が氏族の戦士や成員に対し、彼等の功績を褒め称えた証として、寶貝を賜与する行為が認められる。西周ⅢA期以後にはこれらのことは銘文に現れてこない。問題は敵簋である。敵簋は器は早くに失われて現存しない。馬承源は厲王期だという⁷⁰。成周の大廟で周王は南淮夷征伐に大功をたてた敵に圭鬯・□・貝五十朋を下賜し、さらに各五十田を二か所に与えている。器が無いので判断のしように苦しむが、厲王器というのが本当なら、寶貝の賜与について述べた西周代の最も新しい銘文であろう。一般に西周中期には寶貝も与えられているが、車馬・車輿具・車馬具・兵器・武具・旗の類が賜与されることが多くなってくる。林の編年で言えば、西周ⅡB期がその両者が併存する時期といえよう。西周ⅢA期以後は基本的に賜与の対象物として寶貝は出てこない。春秋の銘文には寶貝の賜与は一切ない。

西周Ⅲ期の裘衛盃⁷¹〔第四図2・2a〕には、瑾璋八十朋の貯が田十田に相当し、赤虎兩、麀率兩、率駘一が二十朋に相当し、田三田と交換されている。朋は商後期から寶貝を数える単位であったが、ここにきて瑾璋という玉環の類も朋を単位にして数えられたことがわかる。麀率などの皮革の類⁷²も貨幣価値の換算は朋を基準としている。このことから物々交換の基準として朋を単位とする寶貝がその基礎にあったことが窺える。なお、裘衛鼎二⁷³（林・西周ⅡB期）では帛

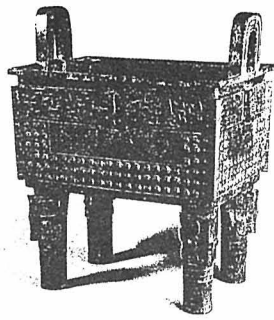
三両、臚帛・金一飯という言い方もある。寶貝が恩賞の対象物として賜与されなくなったところから、交換の基準として寶貝が使われ始めたと言えよう。寶貝が支配者の独占物の段階から解放されて、一般の貨幣として士階級以上の間に流布する段階に至ったからではないかと、私は推定する。ただ問題は先にも見てきたように国によって、時期によって寶貝の扱いは異なるものがある。中原の西周の力の及ぶ範囲で、寶貝の変遷がすべて一律な方向を示したかという問題があろう。殷の遺民達の動向も複雑に絡んでいるといえよう。

西周晩期の段階、晋侯墓地では、葬具としての寶貝の副葬が真貝から、石製や骨製の貝に変化している。このことは、寶貝の役割が貨幣として日常社会に流布させるために、現世で用いられるようになり、墓中での役割は代理の貝で済ませるようになったことを示していると考えられよう。豊富な寶貝が通貨として使用され始めたのは西周晩期前半（林編年の西周ⅢA期）以後だということを示している。一朋がどのくらいの寶貝の数かは、王国維⁷⁴のいろいろな見解⁷⁵があり、時代によっても変化した可能性があると考ええる。ここでは唐蘭⁷⁵のいう遼寧省喀左北洞村2号坑〔第四図1・1a・1b〕より出土した嬰方鼎⁷⁶（林・殷後期Ⅲ期）に「貝才穆朋二百」とあることから、一朋とは寶貝200個だという見解を取り入れておきたい。

蔡運章⁷⁷は裘衛盃〔第四図2・2a〕と晉鼎〔第四図3〕を利用して一朋の貝は一罇の金（銅の地金）と同じ価値がある。十朋の貝は十個の臣（管家奴隸）、百人の人鬲（普通の奴隸）に相当する。三十朋の貝は絲二十罇（=25kg）に相当する。また西周初では一頭の大亀は十朋の（大）貝に相当すると計算している。この時、王国維、郭沫若、陳夢家は一朋を十貝と考えたとまでは蔡運章は言及しているが、自身が一朋の貝は何個と考えるかについては論じていない。

細かく検討しすぎたかも知れないが、西周時代、国によって寶貝の取り扱い方は異なる場所があった。ただ基本には商代に確立した再生の思想がしっかりと根づいていたと思われる。最後に衛国や魯国を含む山東地区などを検討するエネルギーをもたなかった。機会を改めて春秋・戦国から漢代の寶貝を論ずる時にのべたい。

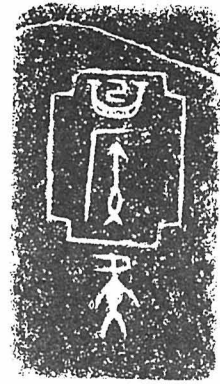
論文を書くに当たって、留学前の忙しいときに惜しみなく協力してくれた黒木優子に感謝する。付図につけた燕国・強国・晋国の各墓葬から出土した青銅彝器、陶器、青銅武器、玉器の集成図は非常に時間と労力を必要とするものであった。ながい間作成したいと念願していた図面である。図面作成に多大の協力をしてくれた多賀（現姓西）まゆみに感謝する。永年力を与えてくれた妻千鶴に心から礼をいっておきたい。おかげで50代の最後の論文を書きあげることが出来ました。また著書や論文をいつも送って下さる林巳奈夫氏にもお礼を申し上げておきたい。なお本論文の一部は、1998年8月16-19日の間に中国殷商文化学会主催、中国社会科学院考古研究所と邢台市文物管理委員会の共催により、河北省邢台市で行われた「'98河北邢台中国商周文明国際学術研討会」で発表した。



1



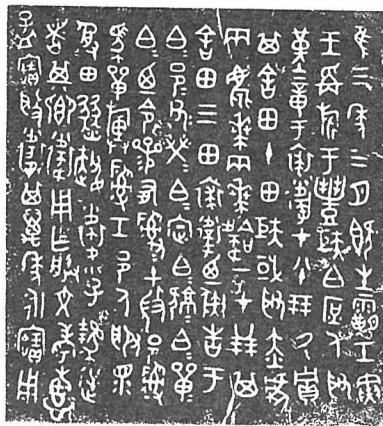
1a



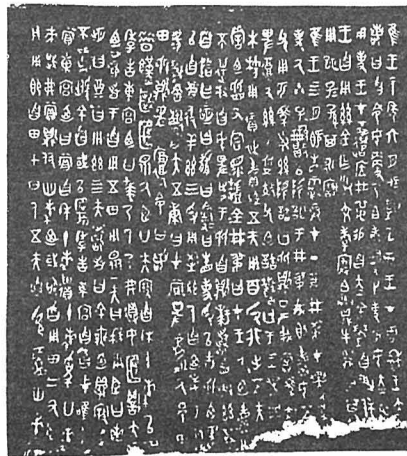
1b



2



2a



3

第四図 西周金文にみる朋と罍

- 1 罍方鼎（遼寧喀左県北洞村）1a 腹銘文 1b 底銘文
- 2 裘衛盃（陝西岐山県董家村）2a 蓋銘文
- 3 晉鼎銘文

注

- 1 a 近藤喬一「商代寶貝の研究」『アジアの歴史と文化』第二輯、1995年10月 アジア歴史・文化研究会
- 1 b 近藤喬一「商代海貝的研究」中国社会科学院考古研究所『中国商文化国際學術討論會論文集』大百科全書出版社、1998
- 2 中国社会科学院考古研究所編著『殷墟発掘報告』1958—1961、文物出版社、1987のうち後岡圓形祭祀坑による。
- 3 林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究—殷周青銅器総覧—』図版、吉川弘文館、1984。鼎127
- 4 林巳奈夫前掲注3、簋76
- 5 J.Wilfrid Jackson, F.G.S., “Shells as Evidence of the Migrations of Early Culture”, Manchester, 1917. 中のG. Elliot Smith, Introductionの記述
- 6 林巳奈夫『中国殷周時代の武器』1972
- 7 中国社会科学院考古研究所『澧西発掘報告』1955-1957年陝西長安県澧西郷考古発掘資料、文物出版社、1962
- 8 中国社会科学院考古研究所澧西発掘隊「1967年長安張家坡西周墓葬的発掘」『考古学報』1980-4
- 9 蔡運章「論洛陽北窑西周墓青銅器銘刻」『甲骨金文与古史新探』1996、蔡運章「洛陽北窑西周墓青銅器銘文簡論」『文物』1996-7。なお『考古』1999-8の情報によれば洛陽市文物工作队『洛陽北窑西周墓』、文物出版社、1999年4月が出版されたとのことであるが原稿執筆時に見ることはできなかった。
- 10 宮崎市定『中国史』上、岩波書店、1977
- 11 中国社会科学院考古研究所・北京市文物研究所琉璃河考古隊「北京琉璃河1193号大墓発掘簡報」『考古』1990-1
- 12 殷璋璋「新出土の太保銅器及其相關問題」『考古』1990-1、李仲操「燕侯克罍盃銘文簡釈」『考古与文物』1997-1、陳平「克罍、克盃銘文及其有関問題」『燕文化研究』1996、柴晓明「論西周時期燕国文化遺存」『北京建城3040年暨燕文明国際研討會論文』1995、柴晓明「華北西周陶器初論」『青果集』吉林大学考古專業成立二十周年考古論文集、知識出版社、1993
- 13 郭寶鈞『濬縣辛村』科学出版社、1964
- 14 殷璋璋「新出土の太保銅器及其相關問題」『考古』1990-1
- 15 北京市文物研究所『琉璃河西周燕国墓地』1973-1977、1995、中国社会科学院考古研究所・北京市文物工作队琉璃河考古隊「1981-1983年琉璃河西周燕国墓地発掘簡報」『考古』1984-5
- 16 白川静「西周史略」『金文通釈』四六、白鶴美術館、1977
- 17 孟憲武「殷墟南区墓葬発掘綜述」—兼談幾個有関的問題—『中原文物』1986-3

- 18 陳光「西周燕国文化初論」『中国考古学的跨世紀反思』下冊、台湾商務印書館、1999では、
第1等級 燕侯、第2等級 燕侯宗族の顯貴 第3等級 異族貴族 第4等級 周人及び異族
中の次貴族 第5等級 燕国平民 第6等級 張家園上層文化に分類している。
- 19 北京市文物管理处「北京地区的又一重要考古收穫」—昌平白浮西周木槨墓の新啓示—『考古』
1976-4
- 20 洛陽市文物工作隊「洛陽林校西周車馬坑」『文物』1999-3
- 21 盧連成・胡智生『宝鷄強国墓地』上・下冊、文物出版社、1988
- 22 李伯謙「從晋侯墓地看西周公墓地制度的幾個問題」『考古』1997—11
- 23 楊寬『西周史』台湾商務印書館、1999
- 24 鄒衡「論先周文化」『夏商周考古学論文集』文物出版社、1980
- 25 朝日新聞社ほか『三星堆』中国5000年の謎・驚異の仮面王国、1998
- 26 近藤喬一注1文献
- 27 中国社会科学院考古研究所禮西發掘隊「長安張家坡西周井叔墓發掘簡報」『考古』1986—1、
中国社会科学院考古研究所禮西發掘隊「陝西長安張家坡M170号井叔墓發掘簡報」『考古』1990—
6、張長寿「1983—1986年禮西發掘資料之二」『文物』1990—7、張長寿「西周的葬玉」—1983
—1986年禮西發掘資料之八『文物』1993—9
- 28 盧連成「張家坡西周井叔墓地的昭穆排列」『中国文物報』1995年3月5日
- 29 白川静『金文通积』五三、五四、白鶴美術館、1981、1982
- 30 白川静『金文通积』五三、白鶴美術館、1981
- 31 鄭振香先生から1998年、河北省邢台市で行われた「'98河北邢台中国商周文明国際学術研討
会」の折り、個人的に伺った。近藤喬一「'98河北邢台中国商周文明国際学術研討会に参加し
て」『山口大学文学会志』第49巻、1999
- 32 上記の折り、北京大学の孫華先生より林巳奈夫さんへの連絡があった。
- 33 林巳奈夫「華中青銅器若干種と羽渦紋の伝統」『泉屋博古館紀要』第十巻、1994
- 34 徐朝龍「三星堆遺跡における二つの遺物埋納土穴の性格をめぐって」『茨城大学教養部紀要』
第25号、1993。徐朝龍「中国青銅文明の中で異彩を放つ三星堆遺跡の青銅遺物群」『五浦論叢』
茨城大学五浦美術文化研究所紀要1、1993
- 35 甘肅省博物館文物隊「甘肅靈台白草坡西周墓」『考古学報』1977-2
- 36 北京大学考古学系・山西省考古研究所「1992年春天馬一曲村遺址墓葬發掘」『文物』1993-3、
北京大学考古学系・山西省考古研究所「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第二次發掘」『文物』1994-
1、山西省考古研究所・北京大学考古学系「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第三次發掘」『文物』
1994-8、山西省考古研究所・北京大学考古学系「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第四次發掘」
『文物』1994-8、北京大学考古学系・山西省考古研究所「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第五次

発掘』『文物』1995-7

- 37 飯島武次「西周時代王墓研究」『中国周文化考古学研究』同成社、1998
- 38 王世民「西周時代諸侯方國青銅器概述」『中国青銅器全集』6—西周2, 文物出版社、1997
- 39 馬承源「晋侯蘇編鐘」『上海博物館』集刊第七期、1996
- 40 李学勤「晋侯蘇編鐘の時、地、人」『中国文物報』1996年12月1日
- 41 曹定雲「周代金文中女子称谓類型研究」『考古』1999-6、王人聰「楊姑壺銘积読与北趙63号墓主問題」『文物』1996—5、李学勤「晋侯邦父与楊姑」『中国文物報』1994年5月29日
- 42 河南省文物考古研究所・三門峡市文物工作隊「上村嶺虢国墓地M2006的清理」『文物』1995-1
- 43 河北省文物研究所『譽墓』—戦国中山国国王之墓—、文物出版社、1995、莒県博物館「山東莒県西大庄西周墓葬」『考古』1999—7にも‘山字形器’が2件出土している。M102と年代の近い墓だと副葬された青銅彝器から判断する。
- 44 山西省考古研究所・太原市文物管理委員会『太原晋国趙卿墓』文物出版社、1996
- 45 山西省考古研究所『上馬墓地』文物出版社、1994
- 46 北京大学考古系編『燕園聚珍』北京大学賽克勒考古與藝術博物館展品選粹、文物出版社、1992ではM6214は西周早期に比定されている。孫華注65『文物』1997—8注30も参照。北京大学考古学系『北京大学賽克勒考古与芸術博物館図録』1993
- 47 俞偉超・高明「周代用鼎制度研究」上・中・下、『北京大学学報』（哲学社会科学版）1978-1、1978-2、1979-1
- 48 注28参照
- 49 注27参照。なお『考古』1999—7の情報によれば、中国社会科学院考古研究所『張家坡西周墓地』中国大百科全書出版社、1999が出版されたとのことであるが、原稿執筆中に見ることはできなかった。
- 50 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館『陝西出土商周青銅器』（三）、文物出版社、1980
- 51 注50参照
- 52 注28参照
- 53 注28参照
- 54 注28参照
- 55 中国社会科学院考古研究所禮西発掘隊「1967年長安張家坡西周墓葬的発掘」『考古学報』1980-4
- 56 林巳奈夫注3 文献参照
- 57 林巳奈夫注3 文献参照
- 58 中国科学院考古研究所『禮西発掘報告』文物出版社、1962

- 59 近藤喬一前掲注1 参照
- 60 河南省文物研究所・平頂山市文管会「平頂山市北澁村兩周墓地一号墓發掘簡報」『華夏考古』1988-1、河南省文物研究所・平頂山市文物管理委員會「平頂山応国墓地九十五号墓的發掘」『華夏考古』1992-3、河南省文物研究所・平頂山市文物管理委員會「河南平頂山応国墓地八十四号墓發掘簡報」『文物』1998-9
- 61 前掲注60の一号墓報告（執筆者は王龍正・孫新民・王勝利）
- 62 前掲注61参照
- 63 前掲注61参照
- 64 林巳奈夫「長沙馬王堆出土の非衣（所謂「幡」）の性格」『中国古玉の研究』吉川弘文館、1991
- 65 孫華「関于晋侯鞮組墓的幾個問題」『文物』1995-9、孫華「晋侯蘇／斲組墓的幾個問題」『文物』1997-8
- 66 林巳奈夫前掲注64参照
- 67 近藤喬一前掲注1 参照
- 68 林巳奈夫前掲注64参照
- 69 林巳奈夫前掲注3 文献参照
- 70 商周青銅器銘文選集編輯組「商周青銅器銘文選集—西周・方國征伐（一）」『上海博物館館刊』1, 1981
- 71 白川靜『金文通釈』四九、白鶴美術館、1978、陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員會・陝西省博物館『陝西出土商周青銅器』（一）、文物出版社、1979
- 72 王龍正・姜濤・類金山「葡鴨銅盃与類聘札」『文物』1998-4
- 73 前掲注71参照
- 74 江上波夫「東亜における子安貝の流伝」『アジア文化史研究』論考篇、山川出版社、1967
- 75 唐蘭『西周青銅器銘文分代史徵』中華書局出版、1986
- 76 喀左県文化館他・北洞文物發掘小組「遼寧喀左県北洞村出土的殷周青銅器」『考古』1974-6
- 77 蔡運章「西周貨幣購買力淺論—兼談西周物価的若干問題—『甲骨金文与古史新探』中国社会科学出版社、1996

図出典

- 第一図1-2 北京市文物研究所『琉璃河西周燕国墓地1973-1977』文物出版社、1995
- 3-4 盧連成・胡智生『宝鷄強国墓地』上冊、文物出版社、1988
- 5 山西省考古研究所・北京大学考古学系「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第三次發掘」『文物』1994-8

- 6 山西省考古研究所・北京大学考古学系「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第四次發掘」『文物』1994-8
- 第二图1 山西省考古研究所・太原市文物管理委员会・陶正剛・侯毅・渠川福『太原晋国趙卿墓』文物出版社、1996
- 2 山西省考古研究所『侯馬鑄銅遺址』(上)、文物出版社、1993
- 第三图1-2 林巳奈夫『中国古玉の研究』吉川弘文館、1991
- 第四图1 中国青銅器全集編輯委員会編『中国美術分類全集 中国青銅器全集』西周(二)、文物出版社、1997
- 2 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委员会・陝西省博物館編『陝西出土商周青銅器』(一)、文物出版社、1979
- 3 高明『中国古文字学通論』北京大学出版社、1996

图版出典

- 图版1-10 北京市文物研究所『琉璃河西周燕国墓地1973-1977』文物出版社、1995
- 图版11 中国社会科学院考古研究所・北京市文物工作队「1981-1983年琉璃河西周燕国墓地發掘簡報」『考古』1984-5
- 图版12 M1046-M1124:中国社会科学院考古研究所・北京市文物工作队「1981-1983年琉璃河西周燕国墓地發掘簡報」『考古』1984-5
M1193:中国社会科学院考古研究所・北京市文物工作队「北京琉璃河1193号大墓發掘簡報」『考古』1990-1
- 图版13-14 北京市文物管理处「北京地区的又一重要考古收穫—昌平白浮西周木槨墓的新啓示」『考古』1976-4
- 图版15-29 盧連成・胡智生・宝鷄市博物館編輯『宝鷄強国墓地』上・下冊、文物出版社、1988
- 图版30-32 甘肅省博物館文物隊「甘肅靈台白草坡西周墓」『考古学報』1977-2
- 图版33 北京大学考古学系・山西省考古研究所「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第五次發掘」『文物』1995-7
- 图版34 M1・M2: 北京大学考古学系・山西省考古研究所「1992年春天馬一曲村遺址墓葬發掘報告」『文物』1993-3
M8: 北京大学考古学系・山西省考古研究所「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第二次發掘」『文物』1994-1
- 图版35 M31: 山西省考古研究所・北京大学考古学系「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓地第三次發掘」『文物』1994-8
M64・M62: 山西省考古研究所・北京大学考古学系「天馬一曲村遺址北趙晋侯墓

地第四次發掘」『文物』1994-8

圖版36 M63: 山西省考古研究所·北京大學考古學系「天馬一曲村遺址北趙晉侯墓地第四次發掘」『文物』1994-8

M93·M102:北京大學考古學系·山西省考古研究所「天馬一曲村遺址北趙晉侯墓地第五次發掘」『文物』1995-7